

『樺太日日新聞』掲載スペイン・インフルエンザ関係記事 目録と紹介

会田理人（編）

Key Words

スペイン・インフルエンザ (Spanish influenza)、樺太 (Sakhalin)、出稼漁夫 (Migrant fishery workers)、
漁場感染 (Spread of the epidemic and outbreaks at fishing areas)

1 はじめに

本稿は、1918～1921（大正7～10）年に猛威を振るったスペイン・インフルエンザに関係する『樺太日日新聞』（以下『樺日』）掲載記事を調査・収集し、作成した目録と記事内容を紹介するものである。目録の作成にあたっては、北海道立図書館北方資料室所蔵のマイクロフィルム（原資料は国立国会図書館）に依拠した。

本稿で扱う「スペイン・インフルエンザ」とは、1918～1921年に世界中で大流行した疫病を指す。当時の新聞では「感冒」、「悪性感冒」、「流行性感冒」、「西班牙感冒」、「世界風（風邪）」など、様々な表現が用いられた。スペイン・インフルエンザを扱う先行研究として、速水融氏の『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ人類とウイルスの第一次世界戦争』があり、本稿でも速水氏の論考に従い、「スペイン・インフルエンザ」と表記する（速水 2006；A.W.クロスビー 2004）。

編者は北海道と日本領南樺太（以下「樺太」）における産業史研究、特に漁業・水産業に関する歴史学・民俗学研究に携わる立場から、産業関係の記事を調査・収集する目的で明治期から昭和戦前期における『樺日』の閲覧調査を続けている。これまでに、樺太における寒天製造や、1933（昭和8）年に以降に顕著となった樺太亜庭湾沿岸地方におけるニシンの不漁と、その対策として主として樺太庁が実施した出稼漁夫対策やコンブ漁奨励策を、『樺日』記事に依拠して明らかにしてきた（会田 2008, 2010, 2012）。

『樺日』には樺太における諸産業の動向を紹介する記事が年間を通して多数掲載されており、漁業・水産業に関する記事内容も多様である。周囲を海に囲まれる樺太では、海産資源に恵まれることから、漁業・水産業に従事する島民が多く、また本州方面から漁業出稼の目的で来島する人びとも多かった。『樺日』では、ニシンやサケ・マス、タラ、コンブ、カニなどの漁期中の漁獲情報や各漁場での話題、関連する漁業制度、海産加工物の生

産・流通、出荷先での売買状況などが詳細に報じられている。また、樺太は、北海道と同様に本州の東北・北陸地方などから出稼漁夫を多数受け入れていることから、『樺日』には、彼らの契約や、連絡船の運行、地元漁民と出稼漁夫との（あるいは出稼漁夫同士の）やりとり、漁場でのさまざまな事故・事件など、多様な情報が掲載されている。広く樺太における漁業・水産業の動向を明らかにする上で、『樺日』は好個の資料である。ここに、編者が『樺日』に注目する理由の一端がある。

年間を通じて出稼漁夫などの労働者を多数受け入れていた樺太において、スペイン・インフルエンザが猛威を振るった当時、彼らの移動や彼らが従事していた漁業・水産業の動向と合わせて、スペイン・インフルエンザの感染拡大・流行などに関する情報を集約し、その特徴を示すことは意義あることだと考える。それ故、スペイン・インフルエンザ流行期における漁場での生産活動に限らず、出稼漁夫の移動や船・汽車の運行など、関連する多様な情報の収集に注意を払うとともに、広くスペイン・インフルエンザと漁業・水産業との関連性がわかるような記事を集めた。このような記事は、当時の樺太の漁業・水産業を取り巻く社会環境を探るうえで重要な情報を多く有することから、記事目録を作成するとともに新聞記事の紹介を試みた。

2 樺太におけるスペイン・インフルエンザ感染患者の発生と感染拡大

樺太でスペイン・インフルエンザはどのように報じられたか。『樺日』に依拠して樺太におけるスペイン・インフルエンザ患者発生と感染拡大の状況を概観したい。

『樺日』は、1918年10月下旬には日本各地や海外におけるスペイン・インフルエンザの患者発生を報じている。その後、同年11月になると連日のように感染拡大や患者急増に関する記事が掲載される。1918年10月から12月にかけて特に目立つのが、尋常小学校や中学校・女学校

における感染拡大に関する記事で、児童・生徒や教員の感染、感染予防、休校・閉鎖に関する内容のものである。

1918年11月5日付記事は、スペイン・インフルエンザが樺太においても流行の兆しを見せていること、豊原で患者が発生したこと、豊原小学校の休校を報じている。さらに、11月7日付記事では、豊原においては樺太庁豊原支庁、樺太庁鉄道事務所、豊原警察署の感染状況を、また大泊においては、樺太庁大泊支庁、大泊警察署の感染状況、大泊の二つの小学校の休校などを伝えている。このように、樺太においてまず感染が拡大したのは、人口の多い豊原と、樺太の玄関口・大泊だった。

同月8日付記事は、樺太庁から各支庁に対して、島民の感染予防や感染拡大防止を徹底する通牒が寄せられたことを伝えている。翌9日付記事は、この時点の豊原では383名の感染患者を出したことを報じている。短期間のうちにスペイン・インフルエンザの感染が拡大し、多数の感染者を出すに至ったことがわかる。

スペイン・インフルエンザの感染患者が確認され始めたころの『樺日』記事には、この疫病を「普通の流行性感冒^(マ)」、「我国では左程に恐るべきに非ず」、「気候風土の悪い処なら悪さをしやうが日本辺では絶対に其心配はない」と報じるものがあることから(『樺日』1918年11月6日記事)、『樺日』読者に不要な心配を与えないような、しかしながら、事態を甘く見るような様子うかがえる。

1918年11月23日付記事は「世界風? / 大蒜で追っ払へ / ストール^(マ)談議」という見出しで、「にんにく」の効能を紹介している。「流行性感冒」の予防には「にんにく」が一番であるという、民間療法を紹介する内容であるが、当時の豊原ではこのような「うわさ」が広まっていたことを読みとることができる。

また、11月27日付記事は、「世界風邪の為に卵の需要が噴いた」として、樺太島内での鶏卵不足を報じている。養鶏業・鶏卵生産がそれほど盛んではない樺太では、島内需要を満たすこと自体が厳しい状況にあったことに加え、冬季に入ると小樽経由で本州方面からの移入に頼るしかなくなるため、スペイン・インフルエンザの影響を受けて需要が高まり、鶏卵価格が沸騰したという。そのため、「鶏卵一個十五銭とは樺太初^(マ)って以来、否全国を通じて破天荒な値段であらう養鶏奨励が必要」と読者に訴えているように、感染拡大による物価への影響も現れていた。

翌1919年には3月から6月にかけて、集中的にスペイン・インフルエンザ関連記事の掲載が続いている。『樺日』1919年5月15日付記事は、この年3月10日から5月8日までの約2ヶ月間の感染患者を総計2,470名、死亡者124名と報じている。なかでも特に感染者が多かったのが、西海岸地方の真岡(1,800人)、本斗(467人)、海馬島(398人)で、豊原は1,578人だった。『樺日』紙面

では、栄養価が高く消化吸収が早いことを宣伝文句にうたう牛乳の広告が、この年の5月に集中的に掲載されていることから(『樺日』1919年5月14、15、18、20、24日)、栄養面からスペイン・インフルエンザ感染対策や治療をうながしつつ、商品の販売拡大を狙った動きもあったのであろう。

樺太では2~3月はタラ漁、その後ニシン漁の時期に入ることから、漁場での感染拡大を報じる記事が1919年から翌年にかけて増えている。この時期におけるタラ漁場・ニシン漁場での感染拡大については、次章で確認したい。

1920年になっても流行状況は変わっていない。同年1月18日付記事が、西海岸の広地村で感染患者が80名発生したことを報じており、同年6月末まで島内の感染状況に関する記事が掲載されている。

この年になると、島内でのワクチン接種が始まり、樺太各地で実施された。1920年1月20日付記事が「大泊医院に於ては時を遷さず予防薬たるワクチン注射液を東京に電報注文し、近く現品の到着を待つて、町民全部に対する予防注射を行ふとの事である」と報じているように、いち早く大泊でワクチン接種準備が進められたようである。2月に入ると、豊原、大泊、真岡の樺太庁病院での準備が整い、2月18日から接種が始まった。1回につき30銭、接種は2回実施することとされた(『樺日』1920年2月18日)。

ワクチン接種が実施されたものの、樺太島内での流行はすぐには収まらず、2月以降も各地で感染は広まり、5月頃まで『樺日』紙面で流行状況が報じられている。

1921年に入ると、スペイン・インフルエンザに関する記事はごく限られた内容になり、主として感染予防に関する通牒、ワクチン接種に関するものとなる。そのような中でも4月下旬に湾内地方の大泊中学校、留多加小学校での感染が報じられている(『樺日』1921年4月21日、4月28日)。

内務省衛生局の調査は、スペイン・インフルエンザは国内では3回にわたって流行が見られたと結論している。他方、速水融氏は、日本全国の新聞資料調査に基づいて、スペイン・インフルエンザの流行は「前流行」と「後流行」の2回あったと指摘している(速水 2006: 98)。今回調査を実施した『樺日』においては、そのような「前後2回」の流行という位置付けは確認できなかった。

内務省衛生局の調査に基づく、第1回流行が1918年8月から1919年7月まで、第2回流行が1919年10月から1920年7月まで、第3回流行が1920年8月から1921年7月までとなった。第1回から第3回までの流行期間中、全国における患者は23,804,673人、死亡者は388,727人にもなった。ちなみに、北海道における患者は563,195人(第1期: 491,179人、第2期: 68,050人、第

3期：3,966人）、死亡者数は12,250人（第1期：8,507人、第2期：3,703人、第3期：40人）となっている（内務省衛生局 2008：103-108、417-421）。

内務省衛生局の報告書の中では、樺太における患者数・死亡者数の記載はない。『樺太日日新聞』1919年12月16日付記事によると、1918年の患者数は13,136人、死亡者数は414人、1919年の患者数は9,513人、死亡者数は444人にのぼったという。

3 出稼漁夫の感染、タラ漁場・ニシン漁場での感染拡大

スペイン・インフルエンザが流行した1918年から21年にかけて、『樺日』には、出稼漁夫の感染や、タラ漁場やニシン漁場での感染拡大を報じる記事が多く掲載されている。樺太におけるニシンやサケ・マス、タラなどの漁場には、北海道や本州方面から多数の出稼漁夫が来島していた。『樺日』掲載記事においては、彼らの国内移動や出稼地での労働従事とスペイン・インフルエンザの流行とを、関連付けて報じるものが少なくない。

『樺日』1919年4月3日付記事は、「海馬島流行性感冒」という見出しで樺太海馬島の感染拡大の経緯を伝えている。樺太南部の西海岸側に位置する海馬島における感染患者に関しては、同年3月18日付記事で130名を超える感染患者を出したことが報じられている。4月3日付記事によると、3月5日海馬島の泊皿に入港した命令定期船大礼丸には、約20名の漁夫が乗船していたが、彼らのなかから上陸して間もなくスペイン・インフルエンザの症状を出す者が現れて、これをきっかけとして9日ごろまでに5・6名の患者が発生した。しかしながら、彼らの症状が現地で行うところの「鱈場風」と呼ばれるものに似ていて、その結果、誤認識されてしまったことで特別な措置がとられないままにされてしまい、瞬間に海馬島内に感染が拡大してしまったという。

この「鱈場風」とは、『樺日』1920年3月10日付記事で「本斗附近各地にては例年鱈場漁夫入込の時期に於て俗に鱈場風邪と称する一種の感冒流行するが常なり」と伝えているように、樺太西海岸の本斗地方において、タラ漁場に従事する出稼漁夫たちが来島する時期に流行する疫病だったようである。1919年3月12日、18日、20日付記事が樺太西海岸の本斗におけるタラ漁を報じているように、ちょうどこの時期の同地方はタラ漁の季節にあたるため、大礼丸に乗船していた漁夫たちは、恐らくタラ漁に従事する目的で海馬島に向かっていたのであろう。体調不良を訴える者がいたであろうが、この季節に来島する出稼漁夫たちの間でよく見られる「鱈場風」だとして見逃されてしまい、結果として感染拡大につな

がってしまったと考えられる。

同年4月12日付記事は、西海岸本斗地方で2月以降に見られた流行は「内地より渡来せる漁夫中該病に罹りたるものあり或は船中にて伝染し上陸せる者等ありて今回流行の原因を為し」と報じている。同様の記事が、翌1920年2月29日にも掲載されている。

『樺日』1919年5月15日付記事は、この年3月10日から5月8日までの約2ヶ月間にわたる感染拡大は、いずれもニシン漁に際して本州方面の流行地から渡って来た出稼漁夫に由来するものであると報じている。感染拡大の原因が、このような出稼漁夫にのみあるわけではないだろうが、出稼漁夫が船や鉄道を利用して移動する季節と、スペイン・インフルエンザ流行がちょうど重なってしまったことから、あたかも出稼漁夫たちが島外からウイルスをもたらしたように見えてしまったのであろう。北海道や本州方面からの出稼漁夫が集中する船（港）や鉄道（駅）、漁場において、感染患者が急増するのを防ぐのは難しかったに違いない。

1920年においても雇われた先のニシン漁場に向かう出稼漁夫の感染や、漁場における感染拡大を報じる記事が多数掲載されている。この年は、3月から4月にかけて西海岸地方のニシン漁場で漁夫たちの感染が相次ぎ、東海岸、湾内地方においても同様の状況となっていた。

例えば、『樺日』1920年3月25日付記事は、樺太西海岸の真岡、本斗地方におけるスペイン・インフルエンザの感染拡大と死亡者急増の状況が続いていることを報じるとともに、周辺地域に感染拡大の恐れがあることから、当局が拡大防止策を講じていることを伝えている。しかし「終熄を見るは茲当分至難なる可きかと悲観されあり因に該悪性感冒の流行を見たる最大原因は同方面各漁村に鱈釣人夫其の他の入り込みたる為めなるべし」と伝えているように、流行の終息に見通しが立たない事態であることを報じるとともに、同地方における感染拡大の原因を出稼漁夫に求めている。

さらに、『樺日』1920年4月20日付記事は、西海岸地方の野田寒、真岡の漁場における感染状況を報じ、同月21日付記事は、西海岸地方において再び感染が拡大しつつある状況を報じている。ここでもその原因は漁期に合わせて来島する出稼漁夫にあるとしている。21日付記事によると、3月初旬の漁期になると、北海道や青森県、秋田県から各漁場に来島する出稼漁夫の中には軽度の罹病者がいて、彼らの中には移動の船中で症状が悪化して死亡する者さえあるという。さらには、樺太の気候風土が郷土とは大きく異なることから、俗に言う「漁場風邪」という一種の風土病にかかり、身体が衰弱したところにウイルスに冒され、集団生活の中で感染が広まったと報じている。

西海岸地方だけでなく、東海岸地方や亜庭湾に面した湾内地方のニシン漁場でも同様の事態が発生しており、各地の警察や医師が感染予防や患者の処置にあたった。同年4月21日、22日付記事は東海岸の元泊における感染患者の発生を報じるものであるが、感染の原因は西海岸の久春内に上陸して元泊に出稼に入って来た漁夫がもたらしたものだとして、豊原支庁元泊出張所長の談話を紹介している。また、同年4月25日付記事によると、4月9日から11日にかけて秋田県や北海道函館方面から多数の漁夫が大泊郡千歳村に到着したが、彼らの間で感染患者が発生し、感染が拡大しつつあることから、駐在巡査は地元の公医たちと協力して対策にあたったという(『樺日』1920年4月21、22、25、28日付記事)。

スペイン・インフルエンザ流行期間の樺太において、地元漁民であるか出稼漁夫であるかは問わずに、どれだけ多くの漁夫が亡くなったのであろうか。正確な人数は不明である。しかしながら、新聞が報じる以上に、多くの漁夫が亡くなったに違いない。『樺日』1920年6月29日付記事は、湾内地方で感染により亡くなった漁夫の追悼法会が開催されることとなり、湾内建網漁業協議会が主催となって1920年7月15日正午から大泊の楠浜寺において執り行われると報じている。

4 おわりに

本稿は、樺太におけるスペイン・インフルエンザ流行の歴史を探る手がかりとして、樺太の豊原で発行された『樺日』に掲載された関係記事の一部を紹介した。樺太において多数の感染者・死亡者が発生したこと、人びとの暮らしや産業活動がスペイン・インフルエンザの影響を受けたことを、学校や漁場の記事を中心に概観した。加えて、樺太ではスペイン・インフルエンザの流行やタラ漁場・ニシン漁場における感染拡大が、出稼漁夫の移動と関連づけて報じられたことを確認した。

多数の出稼漁夫の移動(特に、ニシン漁への移動)が見られたという点では、北海道でも同様である。ニシンやサケ・マス、タラ漁などの季節において、北海道の漁場でも同様の事態が発生したことが予想されるが、これは、今後の調査で明らかにしたい。

本稿で紹介した目録掲載記事については、編者による見落としや誤りが少なくないと思われる。今後は、北海道も含めて、樺太における漁業・水産業に関する史・資料情報の蓄積を進めるとともに、さらなる北海道・樺太漁業史研究の深化を目指していきたい。

謝辞

新聞資料の閲覧調査・複写にあたり、北海道立図書館北方資料室のご協力をいただきました。また、林山佑香里氏には新聞記事の整理にご協力いただきました。記して厚く感謝申し上げます。なお、本稿を執筆するにあたり、科学研究費補助金(基盤(C)一般)「北海道における海女出稼ぎ漁と磯まわり漁業の関係史研究」(研究代表者:会田理人)、研究期間:平成28~令和2年)の成果の一部を使用した。

参考文献

- 会田理人 2008. 日本領期樺太における寒天製造. 北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—2005-07年度調査報告一. pp. 109-126. 北海道開拓記念館.
- 会田理人 2010. 昭和戦前期の樺太ニシン漁—1933~1935年における湾内地方不漁対策を中心に— 北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—北方文化共同研究報告一. pp. 81-102. 北海道開拓記念館.
- 会田理人 2012. 昭和戦前期の樺太におけるコンブ漁. 北海道開拓記念館研究紀要 40: 33-44.
- 速水融 2006. 日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 人類とウイルスの第一次世界戦争. 藤原書店.
- A. W. クロスビー 2004. 西村秀一訳. 史上最悪のインフルエンザ 付「パンデミック・インフルエンザ研究の進歩と新たな憂い」. みすず書房.
- 内務省衛生局編 2008. 流行性感冒 「スペイン風邪」大流行の記録. 東洋文庫778. 平凡社.

新聞(括弧内は当時の発行地名)

樺太日日新聞(豊原町)1918年10月-1921年7月

【目録編、新聞記事編凡例】

- ① 目録に〈年月日〉〈見出し〉〈備考〉の各欄を設けた。
- ② 年月日は新聞記事が掲載された日付を示す。
- ③ 〈見出し〉欄の「/」は改行を示すが、意味内容が伝わるよう一部に手を加えた。新聞記事編中の「/」も同じく改行を示す。
- ④ 〈備考〉欄には記事内容の概要を記した。
- ⑤ 本文編記事紹介中の〔 〕は発表者が補った。〔ママ〕は「原資料のまま」を意味する。
- ⑥ 判読できない文字は□で示した。
- ⑦ 二字以上の繰り返しに使われる踊り字は、〰、〰で表した。
- ⑧ 歴史的かなづかいは、原則として原紙のままとし、漢字は現行のものに改めたが、人名の漢字は原紙のままとした。
- ⑨ 記事中には差別的な表現が少なくないが、当時の歴史環境を理解する上で重要な情報であるとの考えから、改変は行っていない。

目録編

年月日	見出し	備考
1918年 5月21日	久春内管内に／流行性感冒／一時は卅八名の患者	
1918年10月28日	悪性／世界風の流行	
1918年10月30日	呼吸器病は／此うして防げ／病気に罹らぬ様／注意するが肝要	
1918年10月31日	悪性感冒益猖獗	
1918年11月 2日	近衛聯隊の風	
1918年11月 3日	防げ!!!防げ!!!／此の恐ろしい病を／各地蔓延猖獗を極む／若い者の罹り易い病氣／此うして防げば大丈夫	
1918年11月 3日	西班牙風尚旺	
1918年11月 5日	京都感冒死者約四百名	
1918年11月 5日	世界風予防策	
1918年11月 5日	愈々樺太にも／世界風来か？／豊原小学校遂に休校／各家庭での注意／パ ルプでも半数	
1918年11月 5日	ハガキ	世界風
1918年11月 6日	日日聞見	世界風
1918年11月 6日	兎耳鼻目	スペイン感冒
1918年11月 6日	決して恐るべき／異病に非ず／スペイン感冒などと／名は薄気味悪けれど ／其の正体は凡／の流行性感冒	
1918年11月 6日	ハガキ	世界風邪
1918年11月 7日	暴威を逞うする／襲来の悪性感冒／瞬く間に全島に蔓延し／各方面の仕事 に影響を与る事多大	
1918年11月 7日	文壇の鬼才／嶋村抱月氏逝く／昨今流行の／悪性感冒で	
1918年11月 7日	嗚呼抱月氏／希望多き芸術座の事業も／半途にして挫折か	
1918年11月 7日	大阪小学大休校／寒冒の為め休業のもの／百十余校の及ぶ	
1918年11月 7日	兎耳鼻目	スペイン感冒
1918年11月 8日	感冒警戒通牒	
1918年11月 8日	高女臨時休業	
1918年11月 8日	悪性 ^(ママ) 感冒の病毒は／独逸から伝播したのだ／独逸の潜航艇が西班牙の／海 岸へ残して行ったのが因	
1918年11月 8日	悪性 ^(ママ) 感冒と／帝大休校／他専門校三校も	
1918年11月 8日	風呂ばなし	世界風邪
1918年11月 9日	長官母堂感冒にて危篤	
1918年11月 9日	感冒閉鎖学校	
1918年11月 9日	鉄道院欠勤者／七千五百余名／輸送障害甚大	
1918年11月 9日	続々殖える／感冒患者／実に三百八十三名	
1918年11月10日	帝都感冒死者	
1918年11月10日	大泊の／悪性感冒も／絶頂を通り越した／今度の家庭の用心	
1918年11月12日	東京感冒死者	
1918年11月12日	庁中学校閉鎖	
1918年11月12日	感冒菌／北研で発見／ハイフォル氏発見菌	
1918年11月12日	東京も大阪も／専売局では／流行感冒に犯されて／製品間口合はず当惑	
1918年11月13日	流行性感冒にて／急性肺炎を／併発して死亡／此で豊原は二人／各部落状 況調査	
1918年11月13日	西街便り	世界風邪の流行
1918年11月13日	悪性感冒と家庭の用心	アンチピリン丸
1918年11月14日	感冒と病院	
1918年11月14日	長官母堂逝去	
1918年11月14日	流行性感冒にて／巡査死亡／大沢駐在所勤務中	

年月日	見出し	備考
1918年11月15日	真岡通信／支局報	真岡の感冒
1918年11月15日	神保氏夫人逝去	流行性感冒のため
1918年11月15日	豊原小学校／又も休校／来る十六日まで	
1918年11月15日	悪性感冒の／教た尊い教訓／弱り果てた村中／支庁長の感慨？	
1918年11月15日	〔訃報〕	
1918年11月16日	神保氏夫人葬儀	
1918年11月16日	西海岸方面の／越年準備白米欠乏／野田寒以北及び／本斗以南は頗る惨憺	
1918年11月16日	感冒部落僅少	
1918年11月17日	真岡校再開鎖	
1918年11月17日	大泊短信（支局報）	支庁長感冒全快、悪性感冒のため郡教育会延期
1918年11月17日	大泊の感冒は／黴菌が濃厚になった／真の危険は是から／団体はもう大丈夫	
1918年11月17日	漁業組合の／通常総会は／多分来年一月／頃になるだらう	
1918年11月19日	大阪感冒死者／一日四百名	
1918年11月19日	豊原小学校の／悪性感冒は／だんべ／下火に／なつて来た	
1918年11月19日	部落感冒	
1918年11月20日	札幌便り／十三日付 特置員／世界風	
1918年11月20日	竹内氏夫人逝去	流行性感冒のため
1918年11月20日	日比氏夫人逝去	流行性感冒のため
1918年11月20日	感冒死者が多いのは／流行末期のため／始は広く軽く今は尠く重い	
1918年11月20日	川村中將／重態を伝へらる／流行性感冒にて	
1918年11月20日	よもやま／悪性感冒の／薬は蚯蚓	
1918年11月20日	ハガキ	感冒
1918年11月21日	感冒薬／ホシワクチン／発売禁止さる	
1918年11月21日	両令夫人葬儀	
1918年11月22日	感冒の為休校	
1918年11月23日	〔広告〕	ホシ鎮痛解熱薬、小児風薬
1918年11月23日	休戦になつても／呉服物は容易に下らない／年内には変動がない／反つて絹物は騰つた／併し原綿は下つてゐる	
1918年11月23日	世界風？／大蒜で追ッ払へ／ストーヴ談議	
1918年11月23日	ごふくもの／産地商況	
1918年11月26日	通牒	星製薬株式会社のワクチン販売禁止
1918年11月26日	真岡感冒猖獗	
1918年11月26日	家庭／入浴の必要と注意／感冒と入浴	
1918年11月27日	高橋元勳銀総裁重態	流行性感冒のため
1918年11月27日	湾内感冒下火	
1918年11月27日	到る処／鶏卵が無い!!／病院、料理屋では大こぼし／近く来るが一個十五銭だ／此れも世界風の影響か／養鶏奨励の必要がある	
1918年11月27日	豊原小学校の／感冒児童／日に増し／減少して来る	
1918年11月29日	家庭欄／冬季の手入と／毛髪洗方（下）／注意の数々	
1918年11月30日	空恐ろしき／悪魔の呪咀よ／悪性感冒終熄と思ひきや／百日咳又も本島に瀰漫す	
1918年12月3日	登校の都度／検診する／事にして開校した／真岡小学校は／去月二十八日から／教授遅延甚し	
1918年12月5日	南アフリカの／感冒死者五万	
1918年12月7日	各地感冒情況	

年月日	見出し	備考
1918年12月7日	東白浦感冒	
1918年12月14日	感冒休暇学校	
1918年12月15日	〔広告〕	ホシ鎮痛解熱薬、小児風薬
1918年12月17日	本斗支局通信	悪性感冒猖獗
1918年12月19日	豊原小学校の／欠席児童数は／目下六十名	
1919年1月15日	〔広告〕	ヘブリン丸
1919年1月18日	豊原医院拡張	
1919年1月19日	喜美内地方衛生況	
1919年1月19日	今度は／お多福風がやって来た／鉄砲風とも云ふ／罹病は少ないが／死亡率が多い	
1919年1月21日	西班牙風の／被害八十万円／医師会調査	
1919年1月26日	大泊町に／亜庭病院が出来／資本金五万円で／木下旅館を／院舎に当る	
1919年2月5日	全国一府二十県に亘る／二度目の悪性感冒／本社東電に曰く「一月中の新患者／丈けて約八百万人」に上ると	
1919年3月5日	感冒の予防／には頸部を注意せよ	
1919年3月6日	上川丸の／郵便物は／今航の大礼丸／に積んでゐる	
1919年3月6日	亜庭開院期は	
1919年3月7日	大礼丸本日入港	
1919年3月7日	真岡先航の／大礼丸は／本日入港の筈	
1919年3月11日	〔広告〕	感冒に森永ミルクキャラメル
1919年3月11日	大隈老侯も感冒を病む	
1919年3月12日	本斗通信／鱈豊漁と氷盤	
1919年3月13日	〔広告〕	応用風薬
1919年3月14日	大礼昨日入港	
1919年3月18日	〔広告〕	レスピラチン、カギヤピリン、日本一
1919年3月18日	本日開業の／亜庭病院／水も洩らさぬ陣容／は見事に整った	
1919年3月18日	西海岸の鱈漁	
1919年3月18日	亜庭病院披露宴	
1919年3月18日	感冒流行の爲め／庁鉄道大弱り／乗務員が不足で／運転にも差支る	
1919年3月18日	海馬島に／流行感冒猖獗／現在患者百卅名	
1919年3月18日	開院広告	合資会社亜庭病院
1919年3月19日	〔広告〕	応用風薬
1919年3月19日	流行感冒患者／四千余名に達す	
1919年3月19日	海馬島の感冒／通信も不可能	
1919年3月19日	本斗公医派遣	海馬島へ
1919年3月20日	西海岸の漁業況	
1919年3月21日	本斗公医出発	
1919年3月21日	海馬島の感冒／依然として猖獗／公医を乗せて／五十浦丸出帆	
1919年3月25日	感冒警戒通牒	
1919年3月27日	〔広告〕	ヘブリン丸
1919年3月27日	〔広告〕	全治実験と寒時療法
1919年3月28日	海馬島の感冒／遠か口ず終熄せん	
1919年3月29日	〔広告〕	独診断と完治実験
1919年4月3日	海馬島流行性感冒	
1919年4月9日	鶏卵まだ払底／併し何！一寸の間	
1919年4月10日	流行感冒終熄	

年月日	見出し	備考
1919年 4月12日	本斗管内感冒	
1919年 4月19日	〔広告〕	ヘブリン丸
1919年 4月25日	淳宮御病氣	流行性感冒
1919年 4月26日	淳宮殿下御平癒	
1919年 4月29日	海馬島感冒況	
1919年 5月 6日	散江感冒発生	
1919年 5月 7日	悪性感冒猖獗／頗る打撃を受く	
1919年 5月 7日	悪性感冒警戒	
1919年 5月 7日	敷香衛生講話	
1919年 5月 7日	復たも／流行性感冒蔓延／高等女学校は遂に休校／小学校患者二百四十名	
1919年 5月 7日	ハガキ	感冒襲来
1919年 5月 9日	豊原小学校の／臨時休校／感冒患者／三百二十八名	
1919年 5月 9日	流行性／感冒益々猖獗／能登呂局員／全部罹病す	
1919年 5月10日	豊原衛生講演	
1919年 5月14日	急告〔広告〕	豊原町鈴木牛乳店、鈴木商店
1919年 5月15日	流行感冒患者	
1919年 5月15日	散江感冒其後	
1919年 5月15日	散江感冒稍下火	
1919年 5月15日	急告〔広告〕	豊原町鈴木牛乳店、鈴木商店
1919年 5月16日	大泊管内感冒	
1919年 5月18日	急告〔広告〕	豊原町鈴木牛乳店、鈴木商店
1919年 5月20日	急告〔広告〕	豊原町鈴木牛乳店、鈴木商店
1919年 5月23日	真岡通信（十九日支局報）	感冒と清潔法
1919年 5月24日	湾内感冒下火	
1919年 5月24日	西能登呂局の／感冒猖獗口極む／応援のため／通信課より出張す	
1919年 5月24日	急告〔広告〕	豊原町鈴木牛乳店、鈴木商店
1919年 5月25日	泊岸土人の感冒	
1919年 5月25日	ハガキ	悪性感冒その後の模様は
1919年 5月28日	敷香管内感冒	
1919年 5月29日	西能登呂状況	
1919年 6月10日	宗仁方面感冒	
1919年 6月12日	宗仁感冒猖獗	
1919年 6月12日	敷香感冒終熄	
1919年 6月25日	〔広告〕	流行性感冒から全快
1919年 8月19日	これからは／下痢症が流行る／子を持つ親は／注意しなければならない	
1919年 8月22日	漁区衛生状態／勘察加に於ける／（承前）	
1919年 8月28日	鶴城方面状況／森鉄道経理係長談	春ニシン漁期に流行性感冒
1919年10月23日	去年の今頃は／世界風	
1919年11月13日	季候の変化と／風邪に対する注意／子を持つ親は／殊更に注意が肝要である	
1919年12月16日	本年感冒患者数／九千五百余名	
1919年12月17日	軍隊感冒流行	
1920年 1月18日	怖るべき流行感冒は／突如再た本島に侵入せり／西海岸広地の現在患者八十余名／周到なる真岡町の子防計画	
1920年 1月20日	戦慄すべき悪性感冒の／重囲に陥った豊原町／最近大泊にも若干名の患者発生／庁警察部に於ける警戒通牒	
1920年 1月20日	侯爵一家感冒	

年月日	見出し	備考
1920年1月20日	患者廿三万人	
1920年1月21日	池田侯爵家の不幸	
1920年1月21日	感冒予防通牒	
1920年1月24日	流行感冒などには／神經過敏も結構だが／騒ぎが大き過ぎた／道庁途説な大泊の感冒	
1920年1月25日	松方老侯流感	
1920年1月25日	東京市内流感猶熄まず	
1920年1月25日	全国の感冒四十七万人	
1920年1月25日	西海岸便／真岡支局	広地感冒減退、感冒予防注射
1920年1月27日	悪性感冒注意	
1920年1月27日	大泊流行感冒	
1920年1月28日	〔広告〕	ヘブリン丸
1920年1月29日	全国流感者激増／東京大阪兵庫最も甚だし	
1920年1月30日	敷島艦長橋本氏の病死	流行感冒肺炎のため
1920年2月1日	山県老公も流感か	
1920年2月6日	今度の感冒は／若い人が／多く死ぬ様だ	
1920年2月7日	西海岸便／二日 真岡支局	真岡衛生組合
1920年2月7日	豊原医院へ／流感予防／注射液到着す	
1920年2月7日	雄吠泊より	
1920年2月8日	〔広告〕	コマ人參エキス
1920年2月8日	伊国にも流行感冒猖獗	
1920年2月11日	悪性感冒の治療と／奇効ある和漢薬／識者の参考に供すと／某氏の寄せたる実験談	
1920年2月15日	悪性感冒減少	
1920年2月15日	本斗通信／鰯釣乗込一番船	
1920年2月17日	ワクチン注射	
1920年2月18日	悪性感冒猖獗／留多加方面に於る	
1920年2月18日	血精液 <small>（ママ）</small> の注射／本日より実施	
1920年2月18日	小学児童注射	
1920年2月18日	湾内に／感冒発生／一時に十四名	
1920年2月21日	西海岸便／真岡支局	ワクチン注射
1920年2月22日	豊原の流感／予防注射／毎日豊原医院に於て	
1920年2月24日	大絃小絃	
1920年2月24日	〔広告〕	実効散
1920年2月26日	大泊の／流感患者／思ふたより少なし	
1920年2月29日	本斗通信	悪性感冒流行
1920年3月4日	樺太庁中学現況／旧卒業生現状新卒業生志望／教諭欠員三名授業支障なし	寄宿舎生徒一時流行感冒
1920年3月5日	西海岸の／感冒猖獗／果して悪性のもの乎	
1920年3月10日	本斗附近の／鰯場感冒／現在患者二十名／死亡者二名	
1920年3月11日	東京より申上候（一）／松原晩香	流行感冒猖獗
1920年3月14日	暖気に伴れて／豊原に流感続発／警戒が肝要なり	
1920年3月16日	部落費で／流感予防／東湾内各地の／警戒状況	
1920年3月23日	悪性感冒流行／西海岸方面に於る	
1920年3月23日	本斗の流感／死亡者は／罹病者百人／中八人の割	
1920年3月25日	感冒倍々蔓延	
1920年3月26日	本斗通信	悪性感冒
1920年4月7日	川上感冒蔓延	

年月日	見出し	備考
1920年 4月 7日	大泊を襲撃した／流行性感冒猖獗／毎日葬式の絶間なく／去三日には実に十七	
1920年 4月 8日	旅行中の漁夫六名／流感にて斃る／散江敷香方面の鯨漁場に／向って北進陸行中	
1920年 4月 8日	西海岸阿幸の／流感現在患者／三十八名	
1920年 4月13日	〔広告〕	カギヤピリン
1920年 4月16日	豊原町の／流感患者／約七十名／油断はななぬ ^(ママ) ／と某は語る	
1920年 4月20日	本斗より	流感終息に近し
1920年 4月20日	真岡雑俎	野田寒、真岡のニシン漁場で流行感冒
1920年 4月21日	敷香方面近状	東知取で流行感冒
1920年 4月21日	燎原の勢なりし／西海岸の流感状況／目下稍々沈静の姿なるが／一時は全滅の漁場さへありたり／其筋着真岡警察署報告	
1920年 4月21日	元泊附近の／流行感冒患者／多くは陸行漁夫	
1920年 4月21日	浮世めがね	真岡の流行感冒
1920年 4月22日	元泊方面近状	流行感冒患者発生
1920年 4月23日	鶴城地方近状／高橋出張所長談	昨年はニシン漁期に流行感冒猖獗
1920年 4月23日	流感猖獗を極め／大泊医院某医官看護婦を／随へて湾内小田井へ急行す／西沿岸伏子、多蘭内にも／患者続出	
1920年 4月25日	栄浜に／流感発生／現在患者五十余名	
1920年 4月25日	湾内を風靡して／流感猖獗を極む／一、二、三の沢漁場のみにて／罹病者百余名	
1920年 4月25日	元疋病院長／尾中博士死亡／本日十六日流感にて	
1920年 4月28日	東海岸ゆき／漁夫続々来る／廿五日栄浜を通過の三百廿五名	
1920年 4月28日	熱に襲されて深夜迷ひ出た／流感患者海中に／墜ちて溺死す／旅行の途中罹病の漁夫／東海岸真縫に於て	
1920年 4月28日	泊居の／流感終息／気は心口予防注射の／為と云ふ	
1920年 4月28日	東海岸／流感近状／最近其筋着電	
1920年 5月 1日	三月来大泊の／死亡者数／一日平均五人	
1920年 5月 1日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 5月 2日	久春内通信／特置員	流感の猖獗
1920年 5月 2日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 5月 4日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 5月 6日	燎原の勢を以て／豊原の流感猖獗を極む／死亡率は少いが／疋医院の入院患者が三十余名で／通院者百名近い	
1920年 5月 6日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 5月 6日	謹告	大泊樺太ホテル北海屋
1920年 5月 8日	謹告	大泊樺太ホテル北海屋
1920年 5月 9日	謹告	大泊樺太ホテル北海屋
1920年 5月11日	謹告	大泊樺太ホテル北海屋
1920年 5月12日	豊原全町の／人心を脅威して／流感猖獗を極む／忌中の札葬ひの行列／痛ましき町の光景	
1920年 5月12日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 5月20日	新治療器／オキシパサー／本島で販売開始	
1920年 5月20日	豊原管内の／流感益々猖獗／落合白浦方面も猛烈	
1920年 5月22日	〔広告〕	応用風葉
1920年 5月26日	浮世めがね	大泊火葬場の火葬数
1920年 6月 1日	〔広告〕	オキシパサー

年月日	見出し	備考
1920年 6月 3日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 6月10日	感染手当給与／大蔵次官より通牒	
1920年 6月10日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 6月10日	益々偉力を発揮せる／オキシパサー／発明商会の盛況	
1920年 6月15日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 6月16日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 6月17日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 6月29日	漁夫追悼法会／湾内各漁場の流感／死亡漁夫の為に	
1920年 7月 2日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 7月 6日	〔広告〕	応用風薬
1920年 7月 6日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 7月10日	〔広告〕	オキシパサー
1920年 7月11日	島内死亡者数	
1920年 9月23日	全国を脅かした流感／今年は徹底的に／予防法を講ずる／マスク使用口厳命も出でん／衛生局内に流感予防部も特設	
1921年 1月27日	感冒予防は／抵抗力を／強くせよ／鼻感冒を注意／せねば成らぬ	
1921年 1月28日	〔広告〕	流感に中将湯
1921年 1月29日	危惧すべき／人口減少の原因／死亡率がますます増加し／危憂に堪えずと内務高官談	
1921年 2月 3日	家庭／喫煙と殺菌／口中に於ては／効力が衰へる	
1921年 2月 5日	守備隊では／伝染病の／予防接種を／やって居る	
1921年 2月22日	疾病に卓効ある／オキシパサー／とは恠ういふ物	
1921年 2月24日	〔広告〕	オキシパサー
1921年 2月24日	疾病に卓効ある／オキシパサー／悪い副作用が伴はぬ（下）	
1921年 3月 2日	寒冒には／葡萄酒の／熱燗／初期には玉子／酒葛湯杯も妙	
1921年 3月 2日	〔広告〕	理想的感冒薬、守妙
1921年 3月12日	惧るべき／伝染病／差引の損害額が／著しく多い	
1921年 3月12日	家庭／軽い風邪なら／葱の根で／治癒する／其の他植物性の／諸症応用剤	
1921年 3月17日	流感を／予防せよ／庁警察部から／各警察へ通牒	
1921年 3月17日	流行性感冒／予防宣伝ビラ／各要所に掲示	
1921年 3月18日	流感を／予防せよ／（中）流行性寒冒 ^{〔ママ〕} 予防要項／を各警察へ通牒	
1921年 3月19日	流感を／予防せよ／（下）流行性寒冒 ^{〔ママ〕} 予防要項	
1921年 4月10日	此の頃／感冒が／各処に多い／マスクをかける／ことを忘るゝな	
1921年 4月12日	伊東中将逝去	
1921年 4月21日	大泊町／流感猖獗／中学生徒が／三分の一以上罹病	
1921年 4月22日	流感予防／ワクチン注射／範囲は警察へ一任	
1921年 4月28日	〔広告〕	ヘブリン丸
1921年 4月28日	留多加校／流感猖獗／で十日間の休業／ワクチン注射を施行	
1921年 4月30日	家庭へ／昨今流行る／腸加多児／と素人療法	
1921年 5月 5日	久春内通信	流感予防注射
1921年 5月15日	流感予防液／八千五百人分到着	
1921年 5月18日	守備隊流感予防／ワクチン注射	
1921年 6月18日	〔広告〕	応用風薬

新聞記事編

『樺太日日新聞』1918年11月5日

「世界風予防策」

所謂世界風の悪性感冒は疾風□如く全国を風靡するに至り遂に我が樺太にも襲来を見豊原小学校をして休業の止むな□に至らしめたるが庁当局に於ては之れが予防策及び処置等に就て昨日来協議中にて或は一般小学校其他に対し何等かの通牒を発せらるべきが兎□角小学校としては左記の如き方法を取ることに緊急の処置たるべし

一、学校医に於て予防□関する注意事項を協定し各学校に配付し各受持教員をして常に注意を与へ且つ児童を介し各家庭□注意を与ふること

二、各学校医は少くも一週一回以上其の受持学校を巡視□児童の健康状態を観察すること

三、各学校に体温器を備付け体温三十八度以上のものあるときは休学静養せしむる様取扱ふこと

尚予防注意としては（一）住宅の清潔と採光の完全を謀ること（二）身体衣類は日光消毒をなすこと（三）多衆吸集する雑踏の場所に立寄らざること（四）患者若くは其の疑あるものに接近せざること（五）頭痛発熱等苟くも身体□異常ある場合は急速医師の診断を受くこと（六）患者の鼻汁□啖及び之れに汚染したるもの並に患者の居室□医師の指示に従ひ消毒を為すこと□必要なるべく某医師の談に依れば患者二日間位四十度以上の発熱あり二日間経過すれば殆んど快癒□等しき状態となる悪性感冒に罹り□死亡□るものなきも二日間の高熱の為身体虚弱なるものは急性肺炎を併発し之が為死亡するものなれば予防法の第一義としては身体健全にし置くことなりと言へり

『樺太日日新聞』1918年11月5日

「愈々樺太にも／世界風来か／豊原小学校遂に休校／各家庭での注意／パルプでも半数」

逐々流行性感冒□本□にもやって来た、近来各戸此れが為めに臥する者続出し遂に島内休校の魁として豊原小学校では今日から向ふ一週間休校する事になった尤も此の流行性感冒が目下内地方面で流行してゐる所謂世界風邪なるものと同一かどうか解らぬが、何にしても患者の容体と云ひ徴候と云ひ多少符合してゐる處から察すれば或は此れ□世界風邪の一種かも知れぬ或る罹患者の談に依れば初め腰部から大腿部にかけて非常な痺れを感じそれから上肢と準次痺れ□移り行き掌を握る事さへ出来ず、又各関節に痛みを覚えるなど様々な症状を来す、病中は非常に高熱の為め立って自由に歩行出来ず、時には卒倒する事もあるといふ、尤も此病氣は療るのも早く三日乃至は一週間□快癒する相である尾張豊原小学校長は昨日

住訪の記者に対し次の如く語った「風邪の為に欠席した児童は少し□以前からあったが此の土曜日（二日）には八十名にもなつてゐるので一応病院の方へ聴いてみると別に休校する程でもないでせうと□ふ様な回答であつたので一日二日何んなものか形勢を見る事にして居りました、三日は日曜でした四日になると八十名のが百四十何名にもなつてゐるので再び病院の方へ問ひ合はせた処其れでは休校した方が好からうとの事であつたしそれに先生の方でも半分（十名）から休んでゐるといふ始末なので愈々休校する事にしたので、此他目下風邪の者が半数もゐる様な始末です、最も数の多いのは矢張り下級の方で今の処二年生が最も多くなつてゐる様です家庭の方に於ても若し自分の方で病んでゐたなら平癒する迄成る可く他人と接せぬ様、又病んでゐない者は患者の宅へ余り足を運ばない様注意して欲しいと思ふ、又子供さん方でも病氣に罹つてゐたら他へ出さない様にして戴きたい尤も大した事はないだらうと思つてゐるがそれで病院の方では十日間も休校させた方が好からうとの事ですけれどもまあ今週だけ休ませて又様子を觀やうと思つてゐる、療治に關しても軽い者は自宅でも売薬でも療つてゐる人はあるが少し重いつ時は成る可くお医者さんの方で治療させる様にして戴き度い云々尚市内でも各家庭は一般予防に□□注いで貰ひたい世界風邪は肺腸等を犯して倒す事が多いといふ目下京都でも一日々々何十名の死亡者を出して火葬に違がない□中央紙は報じてゐ□、尤も此の病氣□真の世界風邪か何うかは解らぬが若しさうだとすれば充分警戒する必要はある、尚此の風邪の為に目下（昨日）庁病院の入院してゐる患者が四十四名あるそうである、又女学校では目下（昨日）欠席してゐる者が二十名あるそう□が此れは何病で休んでゐるか解らぬといふが多分半数以上は此の病氣に犯されてゐるらしい、又パルプでも殆んど半数も犯されてゐるといふ

『樺太日日新聞』1918年11月6日

「決して恐るべき／異病に非ず／スペイン感冒などと／名は薄気味悪けれど／其の正体は凡／の流行性感冒」

昨今流行つてゐるスペイン感冒、世界風邪などと、名前が如何にも大きくて何だか異病らしく聞えるが、正体はナニニ普通の流行性感冒、気候風土の悪い処なら悪さをしやうが日本辺では絶対に其心配はないと、内務省囑託北嶋医学博士は語つて尚ほ説明して曰く「西班牙風邪は恐らく外国より入港せる船舶に依つて輸入されたものなるべし欧米にては既に今春以来英、仏、瑞典、南北米殆ど全部一種の風邪に襲はれ九月頃は紐育附近カナダの東部を侵し本月に入りては桑港付近ビクトリア、バンクーバー、ホンコン上海南洋諸島、南亞地方最も猖獗を極め殊に南亞の如きは此風邪に冒された者は人口の二分の一

を占め其死亡率は廿人に一人の割合なり、スペイン風インフルエンザの別名にして異種の疾病に非ずインフルエンザは萬延迅速にして従来に於ても歐洲の一地点に派生すれば直ち米國及東洋に伝染して世界的流行を来したり然れども土地氣候の關係にて非常に悪性なる事もあるが我國では左程に恐るべきに非ず症状は発熱し三十九度乃至四十度に達するも三四日間で全治するを普通とす頭痛、腰痛の外胃腸を害し下痢を起す経過の不良者は神經衰弱となつたり又は肺炎を起し中耳炎となり遂には生命に危険を及ぼして居る治療法としては解熱薬を投ずる外別に治療法なし、而して予防法には絶対に患者に接せざること外出の場合には 咽喉を保護すること患者の唾液に注意し多人数集合の場合はハンカチーフを口に当て、予防すること又塩剤若くは酬酸を溶解して一日数回含することを忘れてはならない、之れが予防法として最も利益ある法である。

『樺太日日新聞』1918年11月6日

「兎耳鼻目」

スペイン寒^(マ)冒の襲来で何処へ行つてもゴホン〜と咳の音が蒼蠅^(マ)□今度のこの流行寒^(マ)冒位^(マ)る、伝播の迅速な□しものは稀らしく、朝の内、一家の一人が風□冒き工合だ□枕□就いたら其の夜の中に一家五人が発熱してウン〜苦しんだ家などもある先日豊原劇場で御難を食った吉川亭虎□□かいふ浪花花節の一行、一行中の七十二才になる婆さん丈けが脱れて皆んな罹病発熱の上、暗い楽屋でトヤに就いてゐるとは悲惨だ平生撰生に力めてゐる者は恚ういふ時に効果が現はれる、よしや鼻寒^(マ)冒位^(マ)るは冒いても、発熱といふやうなことなくして経過する、発熱がなければ余病併発の恐れもなく、至極軽々□襲れた期間を過ぎ去□平生□身体に対する静養こそ大事であると、或る丈夫さうな人がストーブ談義に語つてゐた此の寒^(マ)冒は子供の罹るものが多く不慮の余病を併発して危険な状態になるらしい、一に発熱に依る余病の併発であるから、此の点を大に警戒する必要がある。

『樺太日日新聞』1918年11月7日

「暴威を逞うする／襲来の悪性感冒／瞬間に全島に蔓延し／各方面の仕事に影響を与る事多大」

本月初旬頃内地より襲来したる例のスペイン風又□世界風と称する悪性感冒は其の伝播の神速なる驚くべきものあり移入以来一週日を経たざる昨今、既に病菌は全島に瀰蔓して僻遠の地にも及び之等の地の小学校と雖も授業□休業することの頻々、若し夫れ豊泊真の三市街に至りては人口の密接せる丈けに恚る悪疫の伝染も早く昨今市中各家庭に一人の罹病患者なからざる家庭なく全戸殆ど病床の裡に呻吟する修羅場を現出し居れり恚くして各方

面団体、会社、官庁等にありては早くも此の病魔の襲はるゝところ□なりて欠勤者多く為めに各仕事の上と与ふる影響尠からず大恐慌を来しつゝあり豊泊両市街各団体其の後の模様左の如し

豊原支庁 一昨日出勤者僅か四五名に過ぎず此処二三日の間にかく犯されたるものにして昨日は大分多くの顔並べを見たるも風邪気の者も又相当にあるらし

鉄道事務所 一同元氣旺盛にして一人の罹病者なく執務しつゝあり尚停車場も僅か三四名の病者を見るの他皆無事に従業しつゝありと

豊原警察署 署内三名、交番一名のみ大事なし

大泊両校休校 例の悪性感冒のため大泊小学校遂に昨日より向ふ一週間休校に決定せるが船見小学校又本日より休校を見るに至るべしと

同警察署も又 悪性感冒大泊警察署□飛火し巡查六名臥床の止むなきに至れり

同支庁長稍軽快 流行性感冒に襲はれたる村中大泊支庁長は昨日□より稍軽快□赴きたるが岡井庶務係長門澤船見校長も両三日にして全快を見るに至るべく河上西谷主任は全く平癒せりと

中学校大事無 樺太庁中学校内の悪性感冒は職員生徒予防に能く努めたる結果大事に至らずして閉息すべき見込なりと

『樺太日日新聞』1918年11月9日

「続々殖える／感冒患者／実に三百八十三名」

例のスペイン寒^(マ)冒は益々猖獗を極める計りで今の所何時絶滅するか見当がつかない早く流行た内地に於てす□甚だしい勢ひで蔓延しつゝある相で比較の後□た当地では之から方々に延びて行く□仕末である……今まで何でもなかつた真岡町にもすでに侵入し□模様である、試□目下同寒^(マ)冒に取りつか□てゐる患者の数を調べて見ると実に驚ろくべき程であつて。

豊原町だけでも既に三百八十二名と云ふ多数□達し、又今までに全快者三百三十九名も出してゐるから、この感冒□罹つた者が都合七百二十二名に達してゐるわけであつて此の模様では今後幾名出すかわからない。入院する程の重症者も数十名はあ□様だが大抵は自宅療養で全快し□るらしい。中で一人だけ西一条南五丁目三十番地飯盛米八（三七）が卅一日発病し三日には急性肺炎を併発した為に入院したが遂に五日に到つて死亡してしまつた。今の所死亡者は一人だけである。

女学校では現在生徒数百十四名の中五日には廿人六日には廿九名の欠席者を出し六日の出席者の中にも卅一名の患者が□つたので遂に休校の止むなきに至り一昨日から四日間休むことになった。部落の方は如何かと云ふと平穩の様で忌はしい知らせも聞□な□□只清川に多少ある

らしいが皆軽症で売薬で癒ると云ふ程で学校児童には別
に変わった事口ない相である

真岡町は豊原大泊よりもずっと後れて流行し、此頃から
やっと侵入の模様があるので去る四日から小学校に於て
児童口注意して居る口果して五日から患者が現はれて来
た、五日には廿九名六日には卅二名、七日は卅五名昨日
になると急に六十五名の多数に口る欠席者を出し、出席
者中にも尚四十八名の患者があり教員中にも二名を出す
と云ふ有様で遂に本日から十五日迄一週間休校する事に
なった、市街の方では大した事はなく売薬を用ひて治して
居る何しろ此の恐ろしい^(ママ)寒^(ママ)冒は今後どこ迄進むかわからな
いそして殊に小供や若いものに多く取りつく^(ママ)と云ふ意地の
わるいものである、くれ^(ママ)も一般の用心が肝要である

『樺太日日新聞』1918年11月15日

「真岡通信／支局報」

真岡の感冒 最近真岡を襲ひたる流行性感冒は其後益々
各方面に亘り其病勢を猛ましうし十日頃より真岡警察署
員を襲ひたるを始め口官衙吏員中罹病者益々多く市内に
於ても其流行甚だしき有様なるも幸にして真岡市内に流
行しつゝあるものは頗る軽症なるものゝ如く少なきは三
日多口も一週間位にいてづれも治癒しつゝありて地方流
行の如口余病併発生危険口如きも口は目下口処皆無なり

『樺太日日新聞』1918年11月15日

「豊原小学校／又も休校／来る十六日まで」

悪性感冒猖獗を極めたる結果去る五日より向ふ一週間の
臨時休校したる立豊原小学校にては昨日再び開校口職
員並びに児童の登校を見たるが欠席者は百七名ありて之
を休校前日即ち去る四日の欠席者百四十六名に比較し三
十九名の減少に過ぎざるを以て其の成績決して良好と
云ふ能はざるものあり更に現患者に見るも（感冒の気味
ある口出席したるもの）昨日の二百五十六名は休校前の
二百七十四名と其の数に於て大差なく此の儘持続して教
授を見口場合は蔓延の徴あり加ふるに医院及び当局の説
明口依れば現在の悪性感冒は猖獗極度に達すべき模様あ
りて現在は甚だ危険の状態を続け且つ相当の注意を要す
る時期に臨みつゝあるを以て豊原医院と打合せの結果本
日より二日間十六日まで休校するの止むなきに至れり
然して豊原小学校全児童数八百三十余名中既往症者三百
八十名に口未症者は百八十五名の少数に過ぎ口乃ち全校
児童中六百四十三名は感冒に罹りたるものなりと云ふ之
に関して尾張校長は語る「悪性感冒に罹りたる児童には
勿論之が徴あ口児童に對しては決して無理を為し出席せ
ぬ様極力注意を与へ又当時の新聞紙にも之が掲載を願
したる程なるが今回の休校に就ても繰り返して児童に云
ひ含めれば過般の如き罹病者は見ざるべき、何分相当

警戒を要すべき状態に在るを以て安心を許さざるもの
あり罹病者の最も多きは下級生の女子にて二年三年の児
童は欠席者頗る多数あり然れ共欠席者中家人看護口為め
休校し居る者もある故之れが全部を感冒者と見口こと能
はず云々と

『樺太日日新聞』1918年11月15日

「悪性感冒の／教た尊い教訓／弱り果てた村中／支庁長
の感慨？」

大泊の悪性感冒も昨今は薄紙を剥ぐやうに退却して弱り
果てた罹病者の面々は何れも命拾ひでもしたやうに喜悦
に入つてゐる船見校は十三日から大泊校も本日から授業
を始める中学校ももう二三日で英気に満ちた生徒職員
の顔を並べるのだ何だか急口夜が明けかけ口やうな気持…
…茲に今回の感冒より生み出された尊口教訓口して見逃
し難いダイヤモンドが一つ現れた、それは平素酒を近け
なかつた人は癒りも早く苦しみも少なかつたが飲酒家は
何れも小ッピドク見せ付けられた事である彼等の一団は
常に云ふ……何あに感冒口あんなものに薬なんか要らぬ
卯酒一杯で撃退して見せる……と成程軽度のもはそれ
で宣いが元来がアルコールで肉体の組織を麻口せしめ
傾全性を骨抜きにして居る身体である今度のやうな悪性
のものになるとさう御易くは参らぬ憚りながらバチルス
の方が酔っ払ひの血液より強いと計り跳梁されたから堪
らぬ当人の飲酒量口病褥呻吟期とが正比例をしたから痛
快だ……彼等の持論は破られたのである……例の酒豪村
中支庁長は此打算率から最も峻烈に懲戒を受け方で追が
の瘦我慢も逐口降参して仕舞ひあゝ残念な事をした斯ふ
と知つたなら前々から酒の代りに牛乳でも飲んで置けば
よかつたとの述懐余つ程悟られたと見える……牛乳と
云ひば寒^(ママ)冒^(ママ)流行以来の大泊は大の払底で新規申込の分は
瀕死の病人でさへ容易に飲めなかつたといふ始末……マ
サカ其為口落命した者もあるまいがどれ程迷惑を感じた
かは想像の外であつた是を機会として平素の牛乳飲用
癖を養ふことゝ人口に對して不足な牛乳は樺太庁が主と
なつて何とかの速成法を講じて貰ひたいとは罹病者一般
の実感口口るような

『樺太日日新聞』1918年11月23日

「世界風？／大蒜で追ッ払へ／ストーヴ談議」^(ママ)

誰が何処でどう聞き込んだものか流行性感冒の予防には
にんにくが一番いゝといふ話が持上つたゴホン^(ママ)と咳
を交しながらストーヴを囲んで居た課員がそれは耳寄り
の話とばかり寄つて集つて「一体にんにくとはどんな物
か」といふ緒論口ら「にんにくは球根植物にして六口乃
至七口を包口す」と云つたやうな説明となり次で「生食
せんよりは之を焼き生味噌を加へて食するを以て最も便

直とす」といふ結論を得たところで問題はんにく特有の異臭を如何にせんかなる未解決に到って暫時停止することに成□□凡そにんにくを知る限りの者は成る程あの異臭□は聊か辟易である殊に食用者自身より□対者その者にあること周知□事実である課員は茲に於て咳払ひと共にやや沈黙を守るの余儀なきに至ったのは当然なことであつたやがて一人はしたり顔に謂ふやう「この際相手方にも若干の苦痛を忍んで貰ふことは時代の要求であると、高く出た比較的咳の軽いのも止むなくば理髪師のそれの如く口辺□蔽ひを□掛けることである」と消極的に出た、最後に猛烈に咳をするのが「然らば誰彼の差別なく一齊ににんにくを食することである斯くすれば相互の不利益が相殺する訳である」と主張したこの極論が満場一致可決となり給仕小使にいたるまで即時にんにく食用となり今や甲乙なしに例の異臭を吐き合つてゐる但この呪ひが如何なる程度まで成功したかが確實□統計の上に見れて来ないのを遺憾とする（第三者）

『樺太日日新聞』1918年11月27日

「到る処／鵝卵が無い!!／病院、料理屋では大こぼし／近く来るが一個十五銭だ／此れも世界風の影響か／養鶏奨励の必要がある」

毎年冬始めから越年を通じて春先迄は何れの市場でも鵝卵払底の声は堪えない、特に本島など至っては養鶏熱が貧弱で、大抵は農家の副業位が手一杯であるから、辛じて島内の需要を満たす事さへも不可能である、此関係から多くは小樽を経て内地方面から取り寄せるといふ事になるのだが、何しても長い旅に、破壊し易いと来てゐるから小売商人の手から一般需要者の手に移る時は何うしても値段は高くついてゐる、内地では一個三銭四銭でさへ眼を丸くして此の位の処が冬季に於ける最も高価い相場としてある、所謂寒卵などが此んな相場である、普でさえ此の通りなのに今年は例の全国土を風靡した世界風邪の爲めに卵の需要が殖いた処へ持って来て餌の高価い関係から養鶏家の方でも多少消極的にやつてゐるので高価くて品が少ないといふ惨めな結果になったのである其んな事が続いて内地各地でも「卵がない」といふ声を聞く様になったそれが爲め無理をして取り寄せても高価いといふので商人も又一般に遠慮勝ちなので自然当地でも鵝卵払底の声は八釜しい、尤も当地も例の感冒が多少響いた事であらうが、一日として欠く事の出来ない病院や又はそば屋などは戦争の有様である、或人は一日中街中を歩いて僅づか四個しか集められなかつたといふ様な話も聞いた、西屋では割に合はぬから取らないといふ、内地物は原価が八銭も九銭もして其れに運賃をかけこれを計算すると非常な高価なものなる、附近農村からも時々少し宛持つては来るが一個十二銭も呉れなど、云つ

てゐるので取り合はないとの事である、又平林では今は品切れであるが、今度の船で小樽から名古屋物が来る事になつてゐるとの事であるから遠からず潤沢に戻るだらうが、一個の価格を聞くと何うしても小売りで十五銭でなければ間に合いないと云つてゐるが事実さうかも知れぬ、鵝卵一個十五銭とは樺太初^{ママ}づつて以来、否全国を通じて破天荒な値段であらう養鶏奨励の必要□充分ある。

『樺太日日新聞』1918年12月17日

「本斗支局通信」

悪性感冒猖獗 西海岸の悪性感冒は頗る猖獗を極め本斗の如きは之れが蔓延実^{ママ}に甚しきものあり目下本斗小学校にて感冒に罹り居る教職員は三名にして児童の如きは無慮百数十名に達し去る四日より十日迄の臨時休業を爲したるが益々猖獗を尽し終熄の見込なきを以て再び休業せざる可らざる模様なりと

樺太日日新聞』1918年12月19日

「豊原小学校の／欠席児童数は／目下六十名」

悪性感冒も昨今では漸次減少して豊原小学校の欠席児童数は目下六十名内外よりない然し此の六十名の中には極く少数の感冒者を除ては大底百日咳や其の他軽微な風邪並びに麻疹等で欠席者の重なる者は比較的上級生と下級児童に多いこの欠席者の中には上級生は家事の手伝ひ等のため止むを得ず休んで居る者も含まれて居るのは勿論だが毎年十二月頃になると気候の加減や家事の手伝ひ其の他の爲め欠席する者は五六十名に達して居る故今回の欠席者も今に始めた事ではなく本年などは衛生の設備も整頓して居るため成績は何れも良好を示して居る、さて斯様に之に対する学校の注意力もよく行き届いて居るので年が明けると共に益々減少して行く事であらうと思はれる

『樺太日日新聞』1919年3月12日

「本斗通信」

鱈豊漁と氷盤 本斗管内の鱈釣漁業者は着業以来二三回出漁したるも本年は沖合一体に鱈厚群にして何れも満船の漁獲を見たるに三日以後氷盤は沿岸一円に押寄せ出漁不能なれば片時も早く東南風にて掃出するを待ち居る有様にて風次第豊漁を見るならん

『樺太日日新聞』1919年3月18日

「西海岸の鱈漁」

西海岸方面に在りては鱈群漸次濃厚となり来り殊に三月に入り□出漁すべき好風多かりし爲め日々好漁を見つゝあ□が目下の鱈は放卵後の普通骨鱈と称するものにて開鱈となすに不適當なるを以て多くは素丸干となしつゝあり茲旬日後に至らば相当に肥え来るならんと予想せられ

あり目下生売価格は東四円以上五円位なり

『樺太日日新聞』1919年3月18日

「感冒流行の爲め／斤鉄道大弱り／乗務員が不足で／運転にも差支る」

最近潜入して来た悪性感冒はまた〜猖獗を極めて来る傾向があつて到る所でこれに悩まされてゐる樺太斤鉄道の方面も御多分に漏れず現業務のさらでだに忙しいのに搦て、加へて何れも感冒に罹り昨今では非常なる打撃を受けてゐるそうである殊に乗務員即ち車掌のうちでは出勤して乗車してゐる者昨日は二名だけに過ぎない為め目もヒッキリ返る様の多忙さであるがこの二名とても感冒に罹て居るのではあるけれど欠勤すれば乗務員が一人も居なくなる故俄慢して出て居る云ふ事である機関手の中にもやはり之に罹っている者が尠からずある故この儘でゆけば実に由々しい問題が惹起しないとも限らないと云つて当局者は心配して居た

『樺太日日新聞』1919年3月18日

「海馬島に／流行感冒猖獗／現在患者百卅名」

曩に全島に発生猖獗を極めた流行性感冒は当局の措置と一般公衆の注意のため殆ど終熄の觀があつたが最近に於て寒暖の差甚だしき結果か各地にも流行の盛返しを見るらしい情勢となつた、処が俄然西海岸海馬島に同病の発生多く十五日午後同島から本庁警察部に達した報告に拠ると当時患者数百三十名に達し而かも同地駐在の公医も亦た冒され居る為め患者の治療が出来ず悲惨を極めて居るので早速医師を派遣を希望して来た、依つて当局では本斗駐在の公医を急派する予定で目下手配中であるが之れに就いて衛生当局は語つて曰く

三月は殊に注意／気候の激変が因

追々暖かくなるに伴ひ曩に猖獗を極めた流行性感冒も余程下火になつたと思はれた矢先、海馬島で一度に百三十余の患者を出したのを見るとまだ〜警戒の手は緩められない、三月と云ふ月は気候の変目で空風は吹くし又た暖かくなつたかと思ふと急に寒くなるから平年でも風邪に罹るものが多く、気候の寒暖は感冒の患者に甚だしく影響するものであるから一層の注意が肝要である云々

『樺太日日新聞』1919年3月19日

「流行感冒患者／四千余名に達す」

昨秋内地各府県に流行猖獗を見たる流行性感冒は性頗る猛烈にて之れに斃るゝもの甚だ多数なるより当時政庁当局者は島民と協力之れが移人伝播の防遏に努めたるも遂に十月中旬に患者発生し漸く蔓延其の結果流行区域四郡に及び患者数実に四千六十三名の多きを算へ其の中死亡せるも百四十四名を出せるがこれを患者数百人に対

する比例を求むれば三^{〔ママ〕}%五を示し居れり又た流行地の学校にして当時休業せざるものなかりし程なりしが十二月中旬に至りて同病漸く終熄を告ぐるに至れり尚ほ本島中散江、敷香の両郡には遂に同病の発生を見ざりしは這は右両郡は北方に僻在し交通不便なると且つ人口の稀疎なりし為めならんか今同病患者及び死亡者数を郡別に表示すれば次の如し

郡 別	患者数	死亡数
豊 原	八三九	二二
栄 浜	一六七	一五
元 泊	八七	二
大 泊	三二一	八
長 浜	四八	-
留多加	一八六	六
富 内	七八	-
真 岡	八九七	二七
野田寒	二一八	-
本 斗	七一九	五九
泊 居	三八九	五

『樺太日日新聞』1919年3月19日

「海馬島の感冒／通信も不可能」

昨紙三面報道の通り海馬島における流行性感冒は実に猖獗を極め殆んど島内全部に蔓延し終熄の様なき由なるが其の後某所に達したる情報に拠れば郵便局にも侵入して目下罹病のため事務に従事する事能はざると共に電信の如きは通信不可能に陥り通信課内より派遣方を申請し来るも何分罹病の恐れあるを以て希望者なく非常困難に居る由なり然して菅野公医は本斗より昨日出帆の五十浦丸にて赴きたる筈なるが漁業期に近づける事とて何れも戦々恟々の状態にあるものゝ如しと

『樺太日日新聞』1919年3月20日

「西海岸漁業況」

〔略〕同〔＝西海岸〕方面鱈漁は着業当時は頗る好漁の由伝へられたるも最近に至りては時化多く出漁日尠き結果余り漁況面白からず真岡、楽磨附近当業者も一日の出漁にて百束を漁獲するは困難にて大抵五六十束内外に過ぎず去れば当業者中には三月中に大半の収穫を挙げ得ざれば本年の鱈漁は不結果に終らんかと悲観し居るものありと

『樺太日日新聞』1919年3月25日

「感冒警戒通牒」

本島に於ける流行性感冒は最近海馬島を始め各地に再び発生流行を見るべき状態なるより樺太庁警察部にては之れが警戒防遏に就き去る二十一日各警察署に宛て通牒を發せるが同通牒は左の如し

流行感冒警戒の件

首題に関しては客年十一月五日警第一八四七号を以て及通牒置候に付夫々注意警戒中とは存じ候得共未だ終熄を告ぐに至らざるのみならず再び蔓延猖獗の傾向を呈し現に海馬島の如き患者人口の半数以上に及び実に惨憺たるものあり此の際曩の通牒に依り外尚ほ左記に付一般部民に周知せしめ以て各自注意を喚起せしむる等之が予防撲滅上遺憾なきを期せざるべし

右通牒す

追 患者発生の状況付口は概況報告有之度

一、解熱薬を濫用するは却て心臓を衰弱せしめ不幸を招くことある可きを以て身体倦怠、悪寒頭痛、熱感等感冒の疑あるは速に医師診察を受け其の指示に従ふべきこと

一、本病患者は恢復後と雖猶病毒を保有することあるを以て数日間は健康者の接触を避くべきこと

一、宿屋、汽車、汽船等口於て往々伝染することあるを以て本病流行地へは止むを得ざり場合の外可成旅行を見合すべきこと

『樺太日日新聞』1919年4月3日

「海馬島流行性感冒」

曩に猖獗を極めたる海馬島に於ける流行感冒は目下の如未だ終熄には至らざるも殆ど段落状況を呈し而も同地岩田公医も全快し医療に従事することを得るの状態となりたるに依り出張中の本斗菅野公医昨日の便船にて帰斗の途に就く筈なる旨本斗分署長より樺太庁に入電ありたり発生以来経過 同島に於ける発生流行の状況視察の爲め出張せる本斗松崎分署長の調査報告に依れば要領左の如し

三月五日海馬島泊皿に入港せる大礼丸にて北海道より渡来せる約二十名の漁夫中上陸間もなく流行性感冒に罹れるものあり之を嚆矢として九日頃口至り五六名の患者を出したるが所謂「鱈場風」として何等懸念せざりしが十二日には小学生徒十三四名を出し越し十四日には三十四五名の休校者を生じ教員も亦た罹病し十五日より休校せり当時字泊皿のみにて百三十名の患者を出し尚ほ字古丹に蔓延岩田公医も十四日以来発病し一兩日中に十数の患者を出し而も公医の罹病にて医療を受くる能はず売薬欠乏し郵便局長亦冒されて通信機能を害し人心恟々たるに至れり、十五日田中巡査部長よりの電報口接し依り菅野公医に出張を命じ五十浦丸にて二十日海馬島古丹口本職（本斗署長）と共に上陸せるが島民は欣喜して之を迎へ医師に對し口村費中より五百円を謝礼するの決議を為せるに見ても想像するを得べし菅野公医は直ちに患者の診療に着手し廿四日迄の投薬患者は泊皿百五十三、古丹五十五、鷗沢九十三計三百〇一にて死亡者泊皿十古丹二、

鷗沢一目下（二十四日現在）の患者は泊皿十三、古丹十、鷗沢二なり、患者の一般症状先づ発熱悪寒を覚え腰部に疼痛食欲減退を順次に及ぼし其の悪性なるものはカタル性肺炎を起り又高熱激変に際し心臓麻痺を起すものあり産婦妊婦は死亡率高し予防処置として検病的戸口調査に依り患者発見に努め患者を隔離し又詳細なる予防心得を緒所口揭示し其の徹底を期する方法を講ぜり云々

『樺太日日新聞』1919年5月6日

「散江感冒発生」

四日午前十一時十五分発敷香警察署長より樺太庁への入電口抛れば「散江巡査部長派出所より散江口感冒患者続発約九十名、死亡口名を出したる旨電報あり右に對し取敢へず同部長に公医と協力予防撲滅に努むべき旨電命し置きたり病毒は最近陸行漁夫に依り移入せられたるものと察せらる」とあり而も同地は現在住民二百名位なれば住民の半数は感冒に罹りつゝあるものならんと

『樺太日日新聞』1919年5月7日

「悪性感冒猖獗／頗る打撃を受く」

島内における悪性感冒は其の後益々猖獗を極め殊に久春内鵜城方面及び散江に敷香方面は頗る惨憺なる有様にて罹病者続々死亡口今や大恐慌を呈しつゝあり最近通信課に到着せる報告に依れば鵜城萌菱等の如きは各部落を通じて罹病者ならざる者は殆んど一名も無き程にて之れが爲め練期を前に控へて多大の損失を見ると共口郵便局員また之れに罹り通信の如き口辛うじて従事しありと云ふ斯の状態なれば金融経済其の他の方面に及ぼしたる影響は甚大なるものありと

『樺太日日新聞』1919年5月7日

「悪性感冒警戒」

悪性感冒は又復た散江敷香方面に再発し漸次蔓延の兆候あるを以て警察部にては之れが警戒方に就き又復た次の如き通牒を各警察署に致せりと

悪性感冒予防に関する件

首題に関しては曩に屢及通牒置候に付夫れ注意警戒中とは被存候へ共今亦散江に之れが患者の続発せる旨左記の通敷香警察署長より電報有之候処其の系統は渡来の漁夫に依りたるものにて患者は人口の半に及び曩に海馬島に於ける流行と同じく実に惨憺たるものあるは洵に遺憾の次第に有之候に付ては目下漁期に際し各地より渡来す口漁口等に對し充分注意警戒を為す等予防上遺憾なきを期せられ度

右通牒す

追而頃日来流行感冒は其多くは肺炎を誘ひ不幸の転帰を採る者有之に付予防上特に留意せられ度尚本年三月二

十一日警第四七四号追書に關し其の概況時々報告有之度各警察分署長宛

猶ほ現に流行地たる敷香警察署に對口ては当該支庁長と協力し予防撲滅の方策を講じ状況は時々電報すべき旨電牒したりと、因に散江の感冒状況は前報の如くなるが此の外敷香にも二十余名の患者発生したりと

『樺太日日新聞』1919年5月15日

「流行感冒患者」

三月上旬より再び本島各地に發生流行を見たる流行性感冒は未だ尚ほ全然終熄に至らざる有様なるが其の筋に於て調査せる本年三月十日より八日迄二箇月間の患者統計を聞くに總計二千四百七十名にして死亡百二十四名なり之れを前回の流行時に比すれば患者数に於て稍少きも其の病症に至っては稍々悪性なるが如く系統は何れも鯉漁口際し内地の流行地より渡來したる漁夫の齋口せるものなるべしと各地の患者は左の如し

三月十日以降二ヶ月間

	初發時	患者	死者
散 江	五月四日	九〇	五
敷 香	同 五日	一二	-
真 岡	三月初旬	一,八〇〇	九五
大 泊	四月十三日	一七	一
本 斗	四月八日	四六七	三三
鶉 城	同 十日	五〇	一
伊 皿	同	三〇	一
恵須取	同	一八	-
豊 原	三月上旬	一,五七八	八七
海馬島	三月十日	三九八	二四
計		四,六六〇	二四七

因口昨年の流行時の患者四千六十口人中死亡百四十四人にして死亡者は三%五分内地は八%三分なり口云へば本島に於ける該病患者の死亡率は内地の夫れより少きを知るべしと

『樺太日日新聞』1919年5月24日

「湾内感冒下火」

大泊管内西湾内登方面口過般來流行性感冒發生し蔓延猖獗を極めたるに依り大泊署より久保巡查部長同方面に出張中の旭廿一日歸署せり其の報告に依ば能登呂部落居住者十八名の中十三名病者有某灯台看守員は之が為家族口合せ三名死亡し殆ど灯台事務も休止の姿となり居れりと又小浜口口は戸数口人口七人中六名の病者あり更に登岳詰工場の職工百四十人中四十九人罹病し死亡者口名を出せりと右伝播系統は北海道より応募の女工中同病口齋らせるものありて之れが原因口口蔓延せるも口なるべきが口も同方面は昨今稍々下火となりたれば近く終熄を見るべしと

『樺太日日新聞』1919年10月23日

「去年の今頃はノ世界風」

聞いた丈けでも身慄へがして居たものであると冒頭して或る医者は語る「去年の今頃は…と云へば半七サンもどきになるがあの頃は戯談ところではなかつたね、樺太に流行り出したのは今月の下旬頃で第一着に憂目を見たのは大泊、豊原方面の様だつたね、学校は何れも申合せた様に休校を宣し病院は満員を告げ豊原の如きは庁病院の看護婦中看護婦らしい執務振りを見せたのは幾人と云ふ始末である時位我々人間を苦しませた時はなかつた、入院患者を見るに十中の八九は手遅れの為め結果がよくなかつた様である普通の風邪ならば別に大したものではないがあんなに猛烈なものになると手の施し様がない即ち手遅れの度が深ければ深い程影響が大なるものがあつた今年はその様な事はあるまいけれ共こんなに寒さが急激に度を加へて来ると猛烈ではなくとも所謂流行風邪と云ふ奴が襲つて来ないとも限らない予防としては先づ例のマスクを当てること、人集りの場所に余り出入せぬこと、夜分は絶対に外出せぬこと、さうして感冒の気味があつた場合は安静を保つて決して無理をせぬこと、解熱剤を用ゐて頭部を湿布すること等に注意すれば恐ろしい事も何もありやしない、解熱剤としては大部分の人がアスピリンを用ゐる様だが之れは稍もすると肺炎を起す懸念があるから夫よりもピラミドンの方を用ふれば其の惧はあるまいと思ふ、成るべくならば専門医に見て貰ふ方が安全は安全なんだがね

『樺太日日新聞』1919年12月16日

「本年感冒患者数ノ九千五百余名」

本年春季以來本島各地に蔓延せる流行感冒は頗る猛威を逞し為めに各沿岸は折柄鱒〔ルビにしん〕漁期なりし為め少からざる手違ひを生じたる程なるが其の筋の調査に依れば本年度の悪性感冒患者数は總計九千五百十三人にして内死亡者四百四十四人を出せり之れを各警察又は分署別とすれば左の如し

警察署 (分署)	患者数	死亡数
豊 原	三,一五六	七〇
大 泊	八七九	三八
真 岡	二,〇八七	七三
本 斗	一,二四三	一一一
名 好	七七三	五二
元 泊	三四五	二三
泊 居	二二二	一四
敷 香	八七一	六四
計	九,五一二	四四四

にして昨年中の同患者一万三千百三十六に比すれば三千六百二十四の減少、死亡者四百十四に比すれば三十の増

加を示せり

『樺太日日新聞』1920年1月18日

「怖るべき流行感冒は／突如再た本島に侵入せり／西海岸
広地の現在患者八十余名／周到なる真岡町の予防計画」

先年燎原の勢を以て幾多の人命を奪ひたる怖るべき流行
性感冒は、其の後一時終熄の間も無く、頃来内地各方面
に発生して再び各地の人心を脅威し、本島人士亦其の襲
来に就て多大の不安恐怖を懐きつゝあつたが、右は不幸
杞憂に終らずして、倏忽の間に人命を屠り尽す世にも怖
るべき該症発生の飛報は最近突如として一般を戦慄せし
むるに到つたのである発生の場所は真岡郡広地村大字天
茂泊で、同所に於ては本日九日極めて少数の患者を出し
たが蔓延伝播の速度は宛として電光の如く、最初それと
心付かずして売薬其他姑息なる療養に時を遷したる虚に
乗じ瞬く間に土地の老幼を侵し目下の現在患者数は実に
男十三名女六十七名合計八拾名の多数に達して既に三名
の死者をさへ出したと云ふ、事態斯の如く真岡附近に於
ては先年の苦き経験に鑑み一般戦々兢兢として為事も手
に着かざる有様である乃ち真岡支庁同警察等に於ては目
下鋭意其の予防警戒に努め、真岡町民会に於ては既に予
防注射液の購入を附議決定、近く現品の到着を待つて一
般住民に対し予防注射を施すとの事である以上の外豊真
山道清水駅にも若干の同病患者が呻吟して居り汽船便の
順調ならざる今日、同所は島内交通の要路に當つて居る
から、同所を通過する旅行者によりいつ何時豊原方面へ
病菌を携帯移入されぬとも限らぬから、否斯の如き不祥
な場合を想像せねばならぬから、一同は殊の外戒心□□
要である（十七日午後二日□□支局電話）

『樺太日日新聞』1920年1月20日

「戦慄すべき悪性感冒の／重囲に陥つた豊原町／最近大
泊にも若干名の患者発生／庁警察部に於ける警戒通牒」
兇猛憚悪なる流行性感冒が、最近西海岸広地に発生し、
既に何名かの生命を奪つた事は既報の通りなるも、晴天
霹靂の第二報は突如大泊に於ける該症患者の発生を齎し
て、時節柄怖気立つた一般人士に対し更に新らしき脅
威を試みたのである同地に於ける現在患者数は目下尚ほ
調査中に属し、詳細不明なるが、隼の如く其の蔓延伝播
の急速激甚なる、一日の倏安を許さざるものあるを以て、
大泊医院に於ては時を遷さず予防薬たるワクチン注射液
を東京に電報注文し、近く現品の到着を待つて、町民全
部に対する予防注射を行ふとの事である
前門に虎を迎へ更に後門狼に迫られたる今日、庁警察部
に於ては予防警戒に関して詳細なる注意通牒を各所属官
衙に発すると共に、次の如き通俗平易なる注意書を一般
に配付し、湯屋、理髪所の如き比較的多衆人の集合する

場所に掲示して一般人士の注意警戒を促さうである
豊真山道を介して今次悪性感冒の淵源地たる広地を控へ、
今また鉄路九里大泊とは交通上密接の関係を有する豊原
町に於ては今や恐るべき病毒の挾撃に遇ふて所謂危険地
帯となつた訳であるから一部の有識者は之れが予防警戒
に就て目下寄々腐心中であるが既記大泊に於て計画した
るワクチン注射はその効力決して絶対的のものに非ずして、
之れが注射を受けたるもの往々該症に侵されたる実例尠
からず、右の予防に就ては次に配す庁警察部の注意書に
もある如く呼吸保護器（ガーゼマスク）を用ゆるが一番安
心であると云ふ、蓋し同病症の伝染は主として医家の所
謂呼吸伝染によるもので、其の筋に於ても之の方法を以
て最も機宜適切なるものとし、土地の福富薬房と打合の
上同店をして該品の電報注文を行はしめたとの事である
今や怖るべき流行感冒は、戦のける全島民に召臨して居
るが黒き魔の手は如何なる程度迄さし伸べられやう乎、
痛心すべき事の限りである

流行性感冒に就ての注意

内地方面に流行した流行性感冒は最近樺太にも発生し漸
次蔓延の徴候があります此の病は伝染力が猛烈であるか
ら此の後再び一昨年の様な事にならぬとも限りませぬか
ら各自に左記事項を心得て此の病の蔓延せぬ様に注意し
て下さい

- 一、流行性感冒は患者の咳嗽や噴口からも伝染するから
対談するとき殊に患者に接する時は最も注意すること
 - 二、人に近寄るとき、人辺の中に行くとき、外出する
ときは呼吸保護器（ガーゼマスク）をかけるか又は鼻
をハンケチで軽く覆ふこと
 - 三、食塩水か明酸水又は微温湯にて時々含嗽すること
 - 四、流行中は飲食物の贈答を廃止すること
 - 五、風邪を引いたと思つたら直に医師の診療を受くるこ
と
 - 六、患者の居宅は之を別にし用事のない人は猥りに出入
せぬこと
 - 七、患者用の器具寝具等は之を区別すること
 - 八、食器は使用の都度熱湯を注ぐこと
 - 九、寝具は必ず晴天の時日に曝すこと
 - 十、患者の咳痰、唾液、鼻汁等を拭ひたる布片等は之を
焼却すること
 - 十一、治つたら病室や周囲の物件は医師の指示を受け
て消毒すること
- 樺太庁警察部

『樺太日日新聞』1920年2月6日

「今度の感冒は／若い人が／多く死ぬ様だ」

内地に於て猛烈な威力を益々逞うしてゐる悪性感冒は過
般島内にも潜入し来て各階級を通じ恐慌の念を深めたが

幸にも内地に見るやうな大事には至らなかった之れに就き某医師は語る「悪性感冒の予防は殆んど方法がないと云つても差支なく只平素の注意と第一に注射をして各種の集会や人寄りの場所を避けて出来得るだけ外出する時はマスクを使用する事にしたいものである豊原の町を歩いて見るとマスクをかけてゐる通行人は一人も見られないがこれなどは常に注意を怠る者のなす業で勿論極度の流行を見ない結果と罹病者の少いのにも因を有するかも知れないのであらうが病気は何でも同じ事で罹ってから騒ぐよりも罹らない前に細心の注意を払つてこの際マスクを使用する方法をとつて貰ひたいマスク使用の折は二つ宛持つてゐてガーゼがいつでも乾いてゐる様に取り替へて使用しなければ却つて病毒の巣窟となる憂ひがあるのである又屢々百倍位の食塩の微温湯で含嗽する事も或る程度迄の効果がある若し一家内に一人でも患者を出しました時は直ぐ隔離するか入院させるかしなければ忽ち罹病する事になる、今度の感冒は老人よりも若い人が比較的死ぬやうであるから殊更に注意して家庭に在つても罹病の際は空氣の乾燥しない明るい清潔な場所に静に動かず保養するの要があらう云々と

『樺太日日新聞』1920年2月15日

「悪性感冒減少」

島内に於ける感冒罹病者は其の率にたいて之れを内地各方面に比較する時は甚だ尠なるも漁村方面に至りては蔓延の徴候皆無と称し難きに依り当局に於ても極力之れが予防に着手を見る可く既に注文中なるワクチン液も到着せるを以つて近く島内の重なる小学校児童に予防注射液を為す見込みなりと云ふ猶各庁病院にても一般公衆の爲め出来得る限りの便宜を計りワクチン液注射を為す筈なれば出頭受射する様注意されたき由なり

『樺太日日新聞』1920年2月17日

「ワクチン注射」

警察部警務課に於ては流行性感冒防止の目的を以つて今回ワクチン注射液を多数買入れ各庁病院をして注射せしむる由なるが大泊方面の如きは既に過般来より之れを実施しつつあるも豊原に於ては今日中小学生、女学生等に対しワクチン予防液を注射する筈にて近く一般公衆にも之れを施行するやに聞けり

『樺太日日新聞』1920年2月18日

「^(ママ)血精液の注射／本日より実施」

悪性感冒予防の目的を以つて警察部警務課に於ては之れが防止を企画すると同時に一面に於てはワクチン液注射を奨励しつゝ在るが愈々今回具体的に之を発表し本日より一般公衆に対し実施する筈にて希望者は豊原、大泊、

真岡の各庁病院に出頭されたき由なり猶注射実費は一回三十銭の由なるも該液は二回に亘り注射せざるに於ては何等効験なしと云ふ

『樺太日日新聞』1920年2月18日

「小学児童注射」

悪性感冒予防の目的を以つて豊原小学校全児童に対し今日中豊原庁病院に於てワクチン液の注射を無料にて為す筈なれば一般家庭にては特に出席せしむる様注意されたき由なり

『樺太日日新聞』1920年2月21日

「西海岸便／真岡支局」

ワクチン注射 感冒予防のワクチン注射液は今回五千人分到着したるを以て十七日より□洋閣に於て施行したるが此の外小学校にては十八、十九の両日庁立真岡病院にて施行したり□

『樺太日日新聞』1920年2月22日

「豊原の流感／予防注射／毎日豊原病院に於て」

豊原病院に於ては目下毎日流感予防のワクチン注射を行ひつつあるが、小学校生徒は無料にして一般希望者よりは一人より金三十銭を徴すべしと

『樺太日日新聞』1920年2月26日

「大泊の／流感患者／思ふたより少なし」

□□□□□□□□□□□□□□大泊警察署にては悪性感冒の蔓延を予防すべく過般二日間に亘り大泊町内の各戸に就き臨検□患者の有無を取調べたるが案外少なく医療を受け居るもの二十四名、売薬其他を以て自己療治を爲し居るもの三十三名にて治療法並に予防法に就き一般に注意を与へたるが最近大泊病院を初め^(ママ)亜庭病院□他各病院にてワクチン注射を受け予防に心掛くる者多く各病院は之が爲め多忙を極め居る有様なるが斯く一般の警戒予防嚴重なれば此の上蔓延することなく終熄すべし

『樺太日日新聞』1920年2月29日

「本斗通信」

悪性感冒流行 鱈釣漁夫入込と共に侵入し来る感冒は沿岸部落に於ける永年の習慣の如く通称鱈庭風と称し来りたる程にて昨春以来は悪性感冒の移入には何れも感服せざる処なりしが本年も亦南浜町附近には十七日上陸したる漁夫中二名の死亡者を見るに至りたれば一般住民は予防に努力しつゝあるも現に二十余名の患者あり益々蔓延する兆候あるを以て本斗分署長は^(ママ)重なる営業者は勿論一般住民に対し予防警告を与へたり (本斗支局)

『樺太日日新聞』1920年3月10日

「本斗附近の／鱈場感冒／現在患者二十名／死亡者二名」
本斗附近各地にては例年鱈場漁夫入込の時期に於て俗に鱈場風邪と称する一種の感冒流行するが常なりし□□過般同地に入港せる第一高運、第二高運よりの上陸漁夫に就きその健康状態を調査したる際には別に罹病者とても無き模様なりしも、その後更に検病的戸口調査を為したる処現在患者次の如く判明したりと（二月二十二日本斗警察分署調査）

現在患者数

本斗	男	女	計	死亡
南浜通	一〇	四	一四	二
北本斗	三	三	六	-
計	一三	七	二〇	二

尚ほ健康者は目下ワクチンの予防注射を施しつゝありと

『樺太日日新聞』1920年3月16日

「部落費で／流感予防／東湾内各地の／警戒状況」

湾内長浜郡長浜村に於ては曩に本庁より流感予防ワクチン注射液千人分を同遠淵に於ては豊原福富薬店より同上若干名分を何れも部落経費を以て購入の上目下無料にて全部落民に対する予防注射を施しつゝあるが附近各部落に在りても夫々予防警戒の画策なりと云ふ

『樺太日日新聞』1920年3月25日

「感冒倍々蔓延」

西海岸真岡、本斗方面に於ける悪性感冒の蔓延は倍々甚しきを加へ死亡者の如きも百名に対する七%の割合なるが現在の状態にては更に各方面に伝播の虞れあるを以て当局者に於ても之れが防遏には相当の手を尽しある模様なるが終熄を見るは茲当分至難なる可きかと悲観されあり因に該悪性感冒の流行を見たる最大原因は同方面各漁村に鱈釣人夫其の他の入り込みたる為めなるべしとの事なり

『樺太日日新聞』1920年4月7日

「大泊を襲撃した／流行性感冒猖獗／毎日葬式の絶間なく／去三日には実に十七」

最近大泊に於ける流行性感冒は勢ひ中々に猖獗を極めてゐる、二月厳寒の時節には一般の用心も嚴重であつたし、勢ひも内地で騒ぐ程に恐ろしい事もなく大泊警察署が全町に涉つて戸別調査をした時も患者の数が案外少なく医療を受けてゐる者が二十余名、売薬其他自分手当をしてゐる者が三十余名に過ぎなかったが、追々雪が解けて海の氷も影を失くすとモウ春だといふので各自の用心が緩み其処へ感冒が付け込んで遠慮会釈もなく蔓つてゐる、油断してゐる隙間を襲撃された全町の人達は今更の様に驚いて騒ぎ出したがワクチン注射の予防法も大した効力

のあるものでなく昨今毎日の様に其処でも死んだ彼処でも死んだと葬式の絶ゆる日がない、去る三日の如きは葬式の数に実に十七の多きに上つたといふ有様である、斯かる有様であるから火葬場には何時も棺口が重なり合つて遂には白骨が混合して何れが何れやら判別がつかないといふので遺族の人々が当惑する事も少なくはないといふ

『樺太日日新聞』1920年4月8日

「旅行中の漁夫六名／流感にて斃る／散江敷香方面の鯨漁場に／向つて北進陸行中」

曩に西海岸久春内に入港の汽船虎丸及十勝丸より上陸したる漁夫の一団は、其後真縫山道を通り東白浦に出で、散江敷香方面の鯨漁場に向つて北進陸行中なりしが途中流行感冒に侵さるるもの多く、中急性肺炎を併発したる六名は最寄相馬公医其他の医療を受けたるも竟に死亡するに到りたる旨此程同公医より其筋宛電報ありたりと云ふ

『樺太日日新聞』1920年4月20日

「真岡雑俎」

野田寒では鯨漁夫の渡来と共に感冒が流行し附近の漁場で□六十名の中四十名も罹症し一日三四名も死亡すると云ふ風に一時猖獗を極めたが昨今は漸く終熄に近づいたとそうだ真岡付近の漁場でも流感患者が尠からぬ模様であるが市中にも可なりにあるらしい昨今流感の死亡者がチョイ〜あるのにも判る当局では此際検病的戸口調査でも行つて衛生観念の喚起に力めて貰ひたい（支局坊）

『樺太日日新聞』1920年4月21日

「燎原の勢なりし／西海岸の流感状況／目下稍々沈静の姿なるが／一時は全滅の漁場さへありたり／其筋着真岡警察署報告」

一時猖獗を極めて附近住民を脅威したる西海岸の流行性感冒は各自の警戒と周到なる官憲の予防施設とにより其後一時稍々終熄の姿となつた□処、最近再復同地方各地に同病の流行を見るに到り、概して悪性的の傾向を示し随つて該病に仆るもの少数な□ず、目下一般戦々競々たる有様なるが、第二次の襲来を見るに至りたる原因は、三月初旬漁期に入ると共に各漁場経営者は北海道各地青森、秋田県等より雇入れたるより招致したる之等の漁夫中軽微の罹病者等ありたるが船中重態に陥りて死亡するに到りしものありたると、尚ほ渡来後氣候風土等一変せるより、俗に云ふ漁場風邪なる一種の風土病に侵され、身体の衰弱せるに乗じて集团的雑居者中感冒患者より病菌を流布したるに因り、忽ち感染して流行性感冒と一変するに到れるものとあり、就中藻白帆西宗谷鎌田漁場に於ては患者□四の発生を見るに到り尚ほ歌友鈴木漁場に於ては十二名の患者続出口三名の死亡者を見るに到れ

り、外真岡本町一丁目細口曲夕漁場にて本月二日汽船幸明丸にて二百余名の漁夫を雇ひ来り四ヶ所の漁場に配置したる処、広地村□□漁場□配置したる漁夫五十名中大部分同病に侵され重態なるもの二十六名に達し同地岩淵医師の治療を受けつつありしが中五名死亡するに到りたり、其後同漁場に於ては病勢漸次終熄し目下は四五名の患者あるのみなるが事態斯の如く一般細心なる注意を以て予防警戒中なりと云ふ

『樺太日日新聞』1920年4月21日

「元泊附近の／流行感冒患者／多くは陸行漁夫」

元泊警察分署管内に於ける流行感冒患者は去月三十日初発以来総数三十五名中死亡者六名ある□右□多く陸行漁夫にして旅行中感染罹病したる者なりと云ふ

『樺太日日新聞』1920年4月22日

「元泊方面近状」

豊原支庁元泊出張所長西村利雄氏は一昨日来豊、同方面の概況を語って曰く、元泊を徒歩にて出発五日間を費して来豊せるが沿岸は最早冰雪融解又は流失し辛くも徒歩には□支なし同方面沿岸各漁場は先発漁夫の来着に依り目下漁網の補修、漁船漁具の手入れ等に忙がしきが此等先発漁夫は未だ東海岸の航路開けざる為め何れも西海岸久春内に上陸し真縫街道を経て来着したるものなり而も現在同方面に流行感冒患者の発生したるは此等の先発漁夫が島外より移入したるものにして元泊に於て数名の死亡者を出せるも昨今大に鎮静に帰しつゝあるが本年同方面の鯨漁は例年より早かるべき見込なるも漁夫の来着に手間取りつゝあることとて当業者は尠からず焦慮し居れり〔略〕

『樺太日日新聞』1920年4月23日

「鶴城地方近状／高橋出張所長談」

〔略〕 昨年は鯨漁期に際し流感猖獗を極め折角の群来を逸したるも本年は各漁村共に衛生状態良好なれば昨年の如き遺憾は繰返さざるべし〔略〕

『樺太日日新聞』1920年4月25日

「栄浜に／流感発生／現在患者五十余名」

最近東海岸栄浜部落に流行感冒患者続出し、現在患者中医療を受けつゝあるもの男二十名、女十名、医療を要せざる程度にして安静休養中の者二十名に達したるが、右伝染系路は昨今に於ける乗込漁夫が同地□宿に滞在中病毒を撒布伝播せるらしき形跡あり、其筋に於ては、各旅館に対する清潔法施行其他鋭意予防警戒中なりと云ふ

『樺太日日新聞』1920年4月25日

「湾内を風靡して／流感猖獗を極む／一、二、三の沢漁場のみにて／罹病者百余名」

大泊郡千歳村一の沢、二の沢漁場に於ては、本月九日同十一日秋田県及函館郡部方面より多数の漁夫渡来したるが一同の上陸後間も無く之等漁夫中より流行感冒患者猛烈に発生し目下猖獗を極め益々蔓延の兆候あり駐在巡査は土地の公医及部落総代其他の主立者と協力し熱心予防中なりと云ふが、十八日現在の患者数は次の如しと

漁場名	漁夫数	患者数	重症	死亡者
一の沢 武井	九四	二六	五	-
二の沢 同	四七	一六	-	-
二の沢 山内	六七	七	二	一
一、二の沢住 民及漁夫	?	五〇	-	-
計		一〇三	七	一

『樺太日日新聞』1920年4月28日

「東海岸ゆき／漁夫続々来る／廿五日栄浜を通過の三百廿五名」

最近漁期の切迫と共に鯨場行の漁夫は船便毎に多数入り込み来るが、去る二十四日大泊入港の某社外船にて渡来したる漁夫は東白浦、真縫、魯礼等の笹野漁場へ赴くもの二百六十五名、外雑漁者六十名にして、之等は何れも二十五日一番列車にて栄浜へ下車夫々目的地へ向け出発したりと云ふが、尚ほ栄浜以北各漁場行きの漁夫は近来毎日三、四十名宛同地を通過しつつありと云ふ因に今回の三百余名中には、軽症の流感患者数名ありたりと云ふ

『樺太日日新聞』1920年4月28日

「熱に斃されて深夜迷ひ出た／流感患者海中に／墜ちて溺死す／旅行の途中罹病の漁夫／東海岸真縫に於て」

秋田県北秋田郡米内沢町字番沢生れ松淵長太郎（三六）は、散江郡散江村飛澤良太郎の雇漁夫として本島に渡来し、栄浜を経て同地に赴く途中流行感冒に罹り売薬其他にて加療中更に重態に陥り旅行を続ける能はずして、栄浜郡白縫村大字東白浦旅人宿武田三五郎方に滞在中同人は熱の為めあらぬ事を口走り折々失神の状態にて寝所を出づる等危険の兆あるより一同監視を怠らざりしが、去る二日家人の寝静まりたる午前零時頃既記の状態にてふらふらと迷ひ出でたるものと覚しく、程経て同人の寝床が藻脱の殻となり居るに一同吃驚附近心当口を搜索中、旅宿より程近き字浜中笹野漁場附近の海岸に溺死体となりて打ち上げられ居るを発見したりと云ふが、恐らく熱の為め幻覚より迷ひ出で、さては非業の最後を遂ぐるに到れるものならんと云ふ因に死体は旅主前記武田三五郎に引渡されたりと

『樺太日日新聞』1920年4月28日

「東海岸／流感近状／最近其筋着電」

東海岸敷香附近に於ける流感の近状に就き敷香警察署長より其筋に宛て最近次の如き電報ありたりと

本月十七日着せし泊串藤本仁三郎雇漁夫十八日流感にて一名（男）死亡す、十八日当地着三島旅館に投宿中の散江行漁夫二名流感にて滞在療養中、内一名（男）は昨日死亡す、他の一名は稍々全快、本日迄確報を得たる当管内初発以来の感冒は三十三号口漁場十一名発生内二名死亡、知取二十名発生内五死亡、泊串一発生死亡す、敷香二名発生、多く渡来の漁夫にして途中発病したるものなり、差適り著しく蔓延の様相無きも「ワクチン」も目下到着に付施行警戒中

『樺太日日新聞』1920年5月1日

「三月来大泊の／死亡者数／一日平均五人」

三月来流行感冒に脅威された大泊は随分と死亡者を出して或る時は一日十七の葬式が行はれたと云ふ恐ろしい状態を呈し子を捨て、逝く人子に捨てられて老を悲しむ人など種々な悲劇を所々に演出した、本町の北部は大泊流感の根源地と称されて軒並に患者が発生し一家殆ど全滅といふべき惨状に陥ったのもある、東一条北三丁目五番地に日雇稼業をして貧困な生活を営んで居た大澤廣達（四八）といふ者は四月十八日に流感から肺炎に罹って死亡したが実に悲惨な往生を遂げた、同人居宅は一軒飛びの離れた破屋で家族は富子（十〇）と廣（六つ）の男女の子供二人きりで父の病臥中看病も出来ぬのみか自分等の食事さへ出来ず饑餓に迫って隣近所の救助を求むべく外出する事さへ不可能な為め父の死体に取付いて泣き狂ふて一夜を明かしたといふ事である、同人の問ひ吊（ママ）は第二区の手と山本町会書記の同情とを以て行はれ取残された子供の養育方法に就ても夫々人の情に依って講じられたといふ哀れな話もあるが三月来昨三十日までの死亡者数は三百に達し一日五人平均に当たっている、しかし昨今では大泊町内は段々下火になったが長浜方面の沿岸漁村部落では今尚ほ猖獗を極めて居る

『樺太日日新聞』1920年5月12日

「豊原全町の／人心を脅威して／流感猖獗を極む／忌中の札葬ひの行列／痛ましき町の光景」

頃日の豊原町に於ける流行性感冒は、日々何名かの人命を奪って一般を口伏せしめた大泊のそれと異り、病勢極

めて緩慢人皆稍安堵の態であったが、病勢は一兩日来突如口頭して、思ひ設けぬ人々の訃報は、在所に全町民を戦慄せしめて居る、目下豊原医院入院患者の約四十名、栗原同上約二十名は何れも大多数が流感で、通院治療を受けつゝあるもの疔病院約二百名、栗原病院約七十名の外往診を求めて加療中の者両病院を合して三十余件もあると云ふ簾へ貼った忌中の紙、白衣の人俛首れて行く葬ひの群、昨今に於ける豊原町の光景は此上なく痛ましげに見へて居る

『樺太日日新聞』1920年6月29日

「漁夫追悼法会／湾内各漁場の流感／死亡漁夫の為に」

今春湾内沿岸部落に於て流行性感冒猖獗を極め各漁場を襲ひて患者続出したれば雇主は折柄鯨漁の準備季節にて只さへ多忙を極むる中を枕を並べて呻吟する漁夫の為に医者よ薬よと手の届く限り加口に努めたれど其甲斐なくして死亡せる者少からず之等は其当時各雇主に於て懇ろに吊葬（ママ）を営みたれども尚ほ死者全部の追悼会を営むべく湾内建網漁業協議会主催にて来七月十五日正午より大泊楠溪寺に於て□□寺院僧侶を招き読経供養の□□挙ぐる事となりたれば死者□□の人々並に有志の参列焼香を望むと

『樺太日日新聞』1921年4月10日

「此の頃／感冒が／各処に多い／マスクをかける／ことを忘るゝな」

本島では毎年三月の候内地及北海道方面から漁夫が多数入り込んで来ると同時に悪性の感冒が流行して来る所が今年は三月中に於て感冒は余り耳にしなかったが近来の陽気にウツカリ油断した為めか昨今町内各方面に亘って之に冒されゴホン〜と咳をしてゐる者が漸く多くなって来て益々蔓延するの兆候がある一家の内一人に罹れば忽ち他の家人に伝染して終ふ、そして罹病患者は悪性になると孰れも肺を侵され易いことになる、島民はこの際敵に相警め再び往年の惨状を繰り返さぬやう予防上に深甚の注意を払はねばならない、既に罹病した者は勿論であるが健康者は悉く予防マスクを使用することが肝心である、是は啻に鼻口より病菌の侵入を防遏するのみに止まらず自己の黴菌を他に伝播せざる為めで公衆衛生上極めて必要なものである、故にマスクは尠なくも三日に一度位は必ず消毒するやう心掛けてやること、と庁警察部当局語る

Cataloguing and Introducing Articles concerning Spanish Influenza Published in *Karafuto Nichinichi Shimbun*

AIDA Masato (ed.)

From 1918 to 1921, the Spanish flu pandemic raged across the world. We have created a catalogue by examining and collecting articles concerning the pandemic published in the newspaper, *Karafuto Nichinichi Shimbun*. This report introduces the catalogue along with contents of the news articles.

One of the editor's research focuses is clarifying the history of the fishery industry on Karafuto (presently Sakhalin) during its period as Japanese territory. Throughout the year, many laborers, such as migrant fishery workers, immigrated to Karafuto. Considering their involvement in the fishery industry, we believe that there is significant value in summarizing and identifying distinct characteristics of

information concerning trends in the fishery and marine product industries, the operating status of ships and trains that transported these migrant workers, and connections with the spread of the Spanish flu pandemic.

Our examination of *Karafuto Nichinichi Shimbun* has found that the island experienced high levels of infections and deaths. The pandemic significantly affected the lifestyles of people who lived and worked on Karafuto and industrial activity throughout the island. Reports examined show connections between the movements of migrant fishery workers with the spread of the epidemic and outbreaks at fishing areas.